

2021年度 3月修了 修士論文

優れたサッカー指導者の指導哲学の形成と変遷
ー大学サッカー監督を対象とした事例研究ー

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 コーチング科学研究領域

5020A067-9

矢野間 大典

研究指導教員： 堀野 博幸 教授

目次

I.	序論	1
1.	指導者（コーチ）の役割	1
2.	優れた（エキスパート）指導者	1
3.	指導哲学(Coaching philosophy)	2
4.	スポーツ指導者の指導哲学に関する先行研究	3
5.	質的研究方法について	5
6.	ライフストーリーインタビュー法	6
7.	大学サッカーの価値	6
8.	研究目的	7
II.	方法	8
1.	対象者	8
2.	インタビュー方法	8
3.	分析方法	8
4.	研究倫理	9
III.	結果及び考察	10
1.	選手期	10
2.	指導者Ⅰ期	14
3.	指導者Ⅱ期	20
4.	指導者Ⅲ期	22
5.	指導者Ⅳ期	26
6.	指導者Ⅴ期	28
IV.	総合考察	33
V.	現場への提唱	35
VI.	結論	36

VII. 文献	36
VIII. 謝 辞	42

I. 序論

1. 指導者（コーチ）の役割

スポーツ場面における、指導者の役割は多種多様なものだ。私たちは現在、スポーツを指導する立場にある人を指導者（コーチ）と呼び、指導する行為そのものを“コーチング”と呼んでいる。コーチ・コーチングといった言葉は、もとをたどると馬車を意味していた。それが19世紀初期の英国において、家庭教師を意味する言葉として用いられるようになり、さらにはスポーツの場面にも転用されていったといわれている（伊藤, 2017）。現在では、スポーツにおけるパフォーマンスの向上やチームの勝利には指導者の存在が不可欠となっている。

指導者の役割として、マートン（2013）は、「(1) チームを勝たせること、(2) 選手がゲームを楽しめること、(3) スポーツを通じて選手が身体的・心理的・社会的に成長すること」の3つを挙げている。Côté and Gilberd (2009)、「“パフォーマンスの向上”という表現は用いず、“有能さ（Competence）の向上”と表現している。パフォーマンスには成果や成績という意味が含まれており、順位などの競技成績は対戦相手との相互関係によって決定される側面がある。一方、有能さの向上は、できなかったことができるようになる、あるいは、できることの質がさらに向上することを意味しており、必ずしも競技成績の向上を意味するだけではない。また、有能さ以外に自信（Confidence）、関係性（Connection）、人間性（Character）を育んでいく必要が指導者にはある」と述べている。さらに、公益財団法人日本体育協会（2015）は、「グッドコーチは、知識・技能の習得はもちろん、人間力を養うことも重要とされている」とされている。

このように、指導者の機能と役割は選手のパフォーマンス向上や有能さの向上に加えて、選手の心理的・社会的な成長、そして人間性を育むといった、多種多様な役割がある。

2. 優れた（エキスパート）指導者

優れた（エキスパート）指導者にはどのようにしてなるのか、この話題について多くのスポーツ指導者が興味を持つであろう。特定領域において、優れた人と素人を比較した場合、優れた人は、(1) 自分の領域においてのみ優れている、(2) 重要な概念を解決方法に結びつける構造化された知識、(3) 解決すべき問題を深いレベルで理解 (4) すぐれた自己モニタリングスキル、といった特徴があるとされている（Ericsson, 2001）。金井ら（2012）は、人の熟達化の過程について、初心者、一人前、中堅者、熟達者という過程を設定し、説明するなかで、「熟達者は、高いレベルの完璧なパフォーマンスを効率よく、正確に発揮で

き、事態の予測や状況の直感的な分析と判断は正確で信頼できる。また、難しい問題解決状況にも対処できる段階である。」と述べ、様々な経験を通して、人が発達していくことを説明している。スポーツコーチングにおける優れた（エキスパート）指導者とは、(1) 勝利実績 (2) 国または世界レベルでの指導経験 (3) 10 年または 1 万時間以上の指導経験、という 3 条件とされている (Côté et al., 1995 ; d'Arripe-Longueville and Fournier and Dobois, 1998 ; Schinke et al., 1995)。優れた指導者について佐良土(2015)は、「できるだけ多くチームを勝利に導くコーチ」と述べており、勝田 (2002) は「選手・チームなどを勝たせた指導者の言葉には重みがあり、得るものは多い。なぜならば、才能や運だけでなく、人一倍の泥くささや情熱がそこにはあるからだ。また、頂点を極めた人というのは独特の世界観や哲学を持っており、彼らの話を聞いていると、不思議と力が湧いてくる」と述べている。指導現場では、指導者と選手のみならず練習環境やその場の状況といった様々な要因が関わり合う、極めて複雑なものである (伊藤, 2017)。しかし、そのような状況の中でも、優れた指導者は自らの経験や知識をもとに適切な意思決定を選択できる (楠見, 2012)。優れた指導者の行動について、Neal(1978)は、「優れたコーチは科学の諸分野の研究成果や手法を応用してコーチングをするものだ。さらに偉大なコーチはそれに加えて、読みに読んだ戦術は裏の裏まで計算つくした駆け引きを駆使してコーチングし、そのコーチ独特の“〇〇流”とまで称されるほどのスタイルを築いているからだ。」と述べている。

このように優れた指導者は、他の指導者とは違う能力を持っており、他の指導者から憧れや尊敬を受ける存在である。

3. 指導哲学(Coaching philosophy)

まず、スポーツの指導に関する指導者の考え方は「指導哲学」と呼ばれ (児玉ら, 1995)、吉井(1986)は、「指導に成功するため不可欠なものである」と述べている。ロイリーズ(2007)は、「指導者として成功するかどうかは自分自身の確固な哲学を持っているかどうかである」と述べている。この指導哲学は、指導者が選手との関わりにおいて、指導行動を選択する際の基本的な信念と定義されている (ピーリー, 2009)。指導哲学はアスリートやチームの卓越性を向上させ、その卓越性を発揮させるコーチング実践において、(a) さまざまな原理として目指される目的、(b) コーチに方向性を与える基本的方針、(c) コーチによって設定される価値観についての包括的な言明であり、自分がコーチングという営みのなかで大切にしていることとされている (佐良土, 2018)。また指導哲学についてマートン (2013) は、「戦術

や技術に関する知識と同様に、指導者自身の認知や行動の基になる指導哲学を確立することは重要である」と述べており、Horn（2008）は、指導者の指導哲学は指導者の行動に大きく起因し、そのことが選手のパフォーマンスや行動を左右すると述べている。佐良土（2018）は、「各自がしかるべき指導哲学を持つことで、その指導者にとっては精神面でも指導面でも安定性を獲得することができ、さらに、選手や他の指導者に対して自身の指導哲学を明確に表明し、伝えることで目指すべき姿がはっきりして一貫性をもって指導にあたることができるであろう」と述べており、各指導者ごとに指導哲学が存在し、その指導者の指導行動の助けになっていることがいえる。このことから指導哲学は、指導を成功させるために不可欠なものであるとともに、指導者の指導行動に対して重要な役割を果たし、また困難な決断や逆境に直面した際に、指導者として道徳的観念に基づいた最良の決断を下す際の指針となると考えている。

4. スポーツ指導者の指導哲学に関する先行研究

これまでスポーツ指導者の指導哲学に関する研究はいくつも行われてきた。北村ら（2005）は、「スポーツ指導の指導行動を捉えた時、指導者の直面した状況をどのように理解し、どのような意図や予測を持って指導行動を選択したかを説明することが可能となり、その結果、指導者の指導観、指導意図、及び指導行動の全体が明らかになる」と述べている。北村ら（2005）は、エキスパート高等学校サッカー指導者を対象とした研究では、選手の個性や多様性を育みながら、基礎的なスキルの習得を目指す「熟練化」、選手の練習に対する自覚と姿勢「意識化」、スポーツに専念できるような環境への「支援」の3つから構成されていたと述べている。加藤ら（2014）は、競技レベルの異なる高等学校サッカー指導者を対象とした研究において、「取り組む姿勢」、「選手支援」、「人間教育」の3つが全ての指導者に共通していたと述べている。古賀ら（2013）は、Jリーグクラブ・ユース指導者と高等学校サッカー部指導者との指導哲学の比較した研究において、「人間教育の向上」、「プレーのパフォーマンス向上」、「指導者の姿勢」の3つが全ての指導者に共通していたと述べている。また、特異性として高等学校サッカー部指導者は、「良い指導者の輩出」が挙げられ、Jリーグクラブ・ユース指導者においては、「プロ選手の育成」が共通していた。和泉ら（2015）は、トップレベルの大学サッカー指導者を対象とした研究において、「人間教育」、「指導者の姿勢」の2つが全ての指導者に共通していたと述べ、特異性として、「パフォーマンス向上」、「チーム強化」、「環境設定」があると述べている。サッカー以外の競技では松田ら（2020）は、高校男女バ

レーボール指導者を対象とした研究で、選手としての成長・人間的成長を合わせた「先を見据えた選手の成長」が共通していたと述べている。Côté et al. (1995) は、体操競技指導者の指導哲学を明らかにした研究において、「パフォーマンスの向上」のみならず、選手の「人間的な成長」を最終的な目標としていることが述べている。Benni et al. (2010) は、クリケットとラグビーのプロチームの指導者を対象とした研究において、「選手の育成」、「人間教育」、「勝利にこだわりすぎない」の3つがあり、これらは選手がプロとして活動できる期間が限られていることから、競技を引退した後のキャリアを見据え、オフフィールドの面での選手の成長を促す責任がある点を強調した。Gilbert et al. (2004) は、アイスホッケーの指導者とサッカーの指導者のジュニアスポーツの指導者を対象にした多角的な事例研究においては、「スポーツの楽しさ」、「チームの勝利」、「人間的成長」の3つがあり、スポーツ指導者が教育者として幅広い役割を認識していると述べている。これまで指導哲学の要素に含まれる研究は行われてきた。これらの研究では、多くの指導者が人間的成長・人間教育を重視しており、加えて、選手のパフォーマンス向上などの指導哲学を持っていることが明らかになっている。

指導哲学の形成に影響を及ぼす要因を明らかにした研究も行われてきた。澁澤ら (2015) は、大学バスケットボール指導者の指導哲学の形成について、模範になるもしくはならない指導者の「モデル」、スポーツだけでなく様々な「経験」、バスケットボールに対する情熱や指導者の目標といった「個人要因」、指導者を取り巻く「環境要因」の4つの要因を挙げている。Holmes et al. (2020) は、イギリスとオーストラリアのプロラグビー指導者の、指導者になる前までの経験に焦点をあて、現在の指導に影響を与えた要因を明らかにした研究において、「リーダーシップ経験」、「指導者からの指導経験」、「社会的環境（家族、学校、プロチーム）」の3つの要因を挙げている。また、指導者になる前の経験がラグビーに対する「価値観」に強く影響していることが明らかになった。Horn (2008) は、指導哲学の形成について、「社会的文化背景」、「組織の雰囲気」、「指導者の個人的特徴」、「指導者の目標」の4つの要因を挙げている。ロイリーズは (2007) は、サッカー指導者の指導哲学の形成について、「個人的な経験」、「書籍からの学習」、「指導者講習会からの学習」の3つ要因を挙げている。R. L. Jones et al. (2003) は、プロサッカーコーチの指導哲学の形成について、「指導経験」、「コーチ資格」、選手時代も含む「他の指導者の観察」、「他者からのフィードバック」の4つの要因をあげ、特に「他の指導者の観察」が強く影響していると述べている。Benni et al. (2010) は、クリケットとラグビーのプロチーム指導者の指導哲学の形成について、「コーチとしての

経験」、「他者からの影響」、「文献」、「自身の選手経験」の4つの要因を挙げている。伊藤(2017)は、「選手として活動している際に作られる価値観やコーチの役割に対する認識などが、コーチになってから影響を与えていると考えられる。」と述べている。Burton and Raedeke (2008)は、「コーチの経験が指導哲学の形成するもの的一部分である」と述べ、指導哲学の発展には、(1)自身の行動を振り返ること、(2)他者からのフィードバックを受けること、が必要であると述べている。これらの研究で、指導哲学の形成に影響を及ぼす要因として、自身の選手経験や指導経験、他者の指導者や社会的背景、また個人要因といった様々な要因があることが明らかになっている。

これまで、指導者の指導哲学に関する要素の研究とその指導哲学の形成に影響を与えた要因に関する研究は行われてきた。しかし、これらは現在の指導哲学や考えであり、指導経験を経ていく中での指導哲学の変遷過程は明らかになっていない。

5. 質的研究方法について

質的研究方法はこれまで、スポーツ科学領域やコーチング学研究を対象とした研究で多く用いられてきた。この研究方法是、数、量、強度、頻度などを扱う量的研究とは異なり、実験的に検証や測定ができないモノの質や過程、あるいは意味を重視している方法である(Denzin and Lincoln, 2000)。また、質的研究とは、個別性や特殊性を重視し、インタビュー調査結果や文章資料など、テキストや文章が中心となっている質的データを収集し、そのデータにみられる語り手や記録者の思想・考え方・哲学・信条などをくみ取ることである(中島, 2015)。そのため、数値で測定できないスポーツ指導者の考えや哲学を研究対象とすることができる。スポーツ心理学を研究対象としている船橋(2005)は、「体育学、運動科学、スポーツ科学領域において、質的研究が頻繁に見受けられるようになったのは1980年代以降であり、この分野では比較的新しい研究法である」と述べた上で、「スポーツ心理学においても調査・実験に代表される伝統的なアプローチに代わるものとして、多くの研究者が質的アプローチの重要性を主張している」と述べている。さらに會田ら(2011)は、「選手や指導者の実践知をリアリティ豊かに、科学的な知見として表現するには、質的研究が有効である」とスポーツ現場やコーチング現場での質的研究法による研究の有用性を述べている。北村ら(2005)は、「どのような知識・信念・哲学・価値観に基づいて、研究対象者が指導行動を生起しているのかについて深く掘り下げた質的な情報が重要となる」と述べている。スポーツ科学領域やスポーツ心理学の分野において、質的研究方法の役割が重要になってきている。

本研究において、指導者の考えや指導哲学、さらに、指導経験の中で何を感じ、どのように変化して現在に至ったかといった、指導者の内面的なものを明らかにしていくため、質的研究方法が適している。

6. ライフストーリーインタビュー法

本研究の優れたサッカー指導者がどのような出来事を体験し、様々な指導哲学の変遷を経て、現在に至ったかというリサーチクエスチョンに対して、ライフストーリーインタビュー法での説明が適していると考えている。ライフストーリーインタビューは、個人のライフ（人生、生涯、生活、生き方）に焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的研究法の1つである（桜井, 2012）。また、人生の変化の過程を描くことができ、経験の影響や意味を探ることができるのはライフストーリーインタビューである（塚田, 2008）。さらに桜井（2005）は、「インタビューを通して対象者のライフストーリーの構築に参加し、それによって語り手や社会現象を理解・解釈する共同作業に従事することであると考えることができる。語り手の人生や経験とふれあい、それを理解し、解釈するためにはライフストーリー研究は重要なツールにほかならない」と述べている。

本研究では、優れたサッカー指導者がどのような出来事を体験し、様々な指導哲学の変遷を経て、現在に至ったかというリサーチクエスチョンに対して、指導哲学の変遷に関する対象者の経験や体験の時系列ごとの語りが必要になり、ライフストーリーインタビューが適しているといえる。

7. 大学サッカーの価値

近年、大学サッカーの価値が高まっている。大学サッカーもしくは大学スポーツの価値は2つあると考えている。

1つ目は、高い競技能力である。現在、日本プロサッカーリーグ（以下、「Jリーグ」と略す）の新卒での加入において、高校部活動出身、クラブユース出身、大学出身の3つが主な新卒での加入となっている。以下に2011年～2020年までのJリーグ新加入選手の出身をまとめた表を示す（表1）。大学出身選手の数是他2つよりも多く、また、2015年を境に近年増加していることがわかる。出口（2013）によると、「現在のJリーグには、優秀な選手でさえも、大学でサッカーをするということを選択する。そのため現在では、大学サッカーがプ

表1 2011～2020年度までのJリーグ新卒加入選手の出身（人）

年度	高校出身	クラブユース出身	大学出身	合計
2011	19	33	60	112
2012	13	45	52	110
2013	23	43	58	124
2014	18	38	71	127
2015	19	54	53	126
2016	15	43	62	120
2017	20	47	80	147
2018	24	48	84	156
2019	24	53	96	173
2020	27	62	107	196

出典：ゲキサカ (<https://web.gekisaka.jp/>)

ロサッカーのセカンドチームとして育成の役割を担っているといっても過言ではない」と述べている。このように、大学サッカーは高い競技能力があり、Jリーグ新卒加入への大きな道となっている。

2 つ目は、人間教育である。大学は最後の教育機関として扱われ、社会に出る前の最後の場である。山本（2009）は、「大学が教育機関として、“スポーツしかできない競技者”を育てるのではなく、スポーツ競技者として、スポーツ知識人として、社会人として、自立した一人の人間を育てていく重責を担っていることを忘れてはならない」と述べている。

大学スポーツでは、スポーツ競技者としてのキャリアだけでなく、その後の社会人として自立した人間を育成することが求められている。

8. 研究目的

本研究の目的は、日本における優れた大学サッカー指導者の指導哲学がどのように変化して、現在の指導哲学に至ったのか、その変遷過程を、ライフストーリーインタビュー法を用いて事例研究として明らかにすることである。本研究の知見は、コーチング学研究、スポーツ指導者を対象とする研究として、新たな1事例を提示することができ、また、現在指導の現場に携わっている指導者や若手の指導者、指導経験の浅い指導者にとって有意義な知見になると考えられる。

II. 方法

1. 対象者

本研究では、大学サッカーの指導者を対象とする。その指導者の指導哲学の形成に至った経緯や経験、出来事など、より有益な情報を手に入れるためには、研究対象に長時間のインタビューを行うことが重要である。そのため複数名にインタビューを実施することは困難である。本研究の対象者の条件として、Côté et al. (1995) による優れた指導者の3条件を参考にし、大学サッカーでの実績や指導実績、選手育成の観点から(1)～(5)の条件すべてを満たす、大学サッカー指導者を対象とし、事例研究として研究を進めることとした。対象とした指導者X氏のプロフィールを表2に示す。

- (1) 大学サッカーで10年以上の監督歴
- (2) 年代別日本代表監督を務めた実績
- (3) 全国大会レベルの大会でベスト4を5回以上の実績
- (4) 複数年に渡り継続的に、毎年Jリーグに選手を輩出した実績
- (5) 過去にW杯もしくはオリンピック出場選手を輩出した実績

表2 X氏プロフィール

指導歴	37年
競技歴	年代別全国大会優勝 大学リーグ優勝
指導年代	高校生、社会人、大学生 年代別日本代表監督

2. インタビュー方法

インタビューは2021年8月～9月の間におこなった。インタビューは計7回行い、合わせて8時間25分となった。インタビューは、1対1の対面でライフストーリーインタビュー法を用いて実施した。初回のインタビューでは「サッカーを始められたきっかけはなんですか」という質問から始め、その後は、特に決まった質問は用意せず、時系列に沿って柔軟に変化させ、その時々感じたことや重要な出来事を聞くようにした。インタビュー中、聞き手となる研究者は良き聞き役に徹するよう心がけた。また、語り手と聞き手の解釈の違いがないよう確認をしながら進めるようにした。

3. 分析方法

まず、インタビュー音声を対象者の承諾を得たうえで、ICレコーダーに録音し、音声デ

ータはインタビュー後速やかに文字おこしを実施した。テキストされたデータを時系列順に整理した。インタビューの語りから変化を示す発言（例：「考え方が変わったのは…」「きっかけに考え方が変わった」）をもとに指導哲学の変化があった時期・出来事ごとに、指導者Ⅰ期、指導者Ⅱ期、指導者Ⅲ期、指導者Ⅳ期、指導者Ⅴ期、の5つに区分した。区分した5つの時期ごとの指導哲学を抽出するためにそれぞれテーマ分析を行った。テーマ分析は、質的分析手法の1つであり、質的データの中にあるパターンを見出すための体系的なプロセスである（Boyatzis, 1998）。このテーマ分析について土屋（2016）は、（1）研究協力者の語りをを用いる方法、（2）分析結果を数量化する方法、の方法があると述べており、（1）が適しているのは、①研究協力者が少ない場合、②結果の一般化を求めない場合、③結果に強い特異性が認められる場合、などである（Boyatzis, 1998）。分析方法はコード化し、カテゴリー化を行う方法であり、他の質的分析法と大きな違いはない。しかし灘光（2014）は、「個別事例にみられる主観的意味の世界を理解することを目的とし、それに関わるカテゴリーを（筋も読み込みから展開してくるテーマ）抽出する。グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、GTA）と混同されることがあるが、GTAが複数の事例に共通するコアとなる概念を抽出し仮説を生成することが目的であるのに対し、テーマ分析は一つひとつの事例にみられる個別の主観的世界に注視する点が大きく異なる。また、データの扱い方においても、一般的にGTAではデータを切片化し（流派によって考えかたの違いはあるが）、コード化・カテゴリー化するが、テーマ分析ではテキストの流れ・シークエンスを重視するといった違いがある」と述べている。本研究では、ライフストーリーインタビュー法で対象者の生活世界や経験を収集するためデータに強い特異性がみられる。また対象者を1名とし、一般化を求めないためテーマ分析を用いて各時期の指導哲学を分析した。分析過程において、スポーツ心理学領域で質的分析を行う大学院生2名とコーチング学研究領域の大学院生1名でインタビューデータを共有し、議論を通して分析を行い、信頼性を確保した。

4. 研究倫理

本研究は、人を対象とする研究に関する研究計画を立て、早稲田大学研究倫理委員会（承認番号：2020-356）の承認を得てから研究を実施した。また、対象者にはあらかじめ研究目的、方法の説明を十分に行い、書面にて参加に対する同意を得て行った。

III. 結果及び考察

63 ページにわたるテキスト化されたインタビューデータから 383 の意味単位が得られ、その中から「指導哲学」と「指導哲学の形成・変遷」の 2 つに該当すると思われるものを抽出し、最終的に 112 の意味単位を本研究の分析対象とした。先行研究から指導哲学の形成要因に自身の選手経験も言及されていたため、X 氏の選手時代も分析対象とした。インタビューの語りから変化を示す発言（例：「考え方が変わったのは…」 「…きっかけに考え方が変わった」）をもとに、表 3 に示すように指導哲学の変化があった時期・出来事で指導者Ⅰ期、指導者Ⅱ期、指導者Ⅲ期、指導者Ⅳ期、指導者Ⅴ期、に区分した。また、指導者Ⅰ期、指導者Ⅱ期、指導者Ⅲ期、指導者Ⅳ期、指導者Ⅴ期、の指導哲学を図式化したものを図 1 に示す。

表 3 X 氏の時期区分・出来事・指導歴

時期区分	指導者Ⅰ期	指導者Ⅱ期	指導者Ⅲ期	指導者Ⅳ期	指導者Ⅴ期
出来事		社会人との関わり	リーグ戦 0 勝	初優勝	体罰事件
指導歴	高校教諭 ～ 社会人チーム監督前期	社会人チーム監督後期 ～ 大学サッカー部監督 1 期	大学サッカー 部監督 2 期	大学サッカー 部監督 3 期	大学サッカー 部監督 4 期

1. 選手期

選手期のインタビューデータから 15 の意味単位が抽出された。選手期の分析過程を表 4 に示すように、X 氏の選手期のインタビューデータから、指導哲学に影響している経験、「勝利への強い信念」、「自分で考えてサッカーに取り組む」、「目標達成」、「先生が絶対的な権威の時代」の 4 つテーマを抽出した。また以降、語りを『 』内に示す。

1) 勝利への強い信念

X 氏は選手期、勝利への強い信念があった。語りのなかに、『自分が日本一になりたいって思っても、自分だけじゃなれないから、周りにはタバコ吸うのはいたりとかさ、ちょっとだめなのもいて、そうゆうのと何回も喧嘩したりしたし、その本気度がちょっと違かったかな』と語っており、X 氏は、勝利を追及するなかで周りも取り込みながらサッカーに取り組んでいた。また、語りのなかで、『お前らのサッカーはだめだから勝てないんだろって親に言われた時に悔しかった』と語っており、サッカーに対して勝利への執念が示唆される。

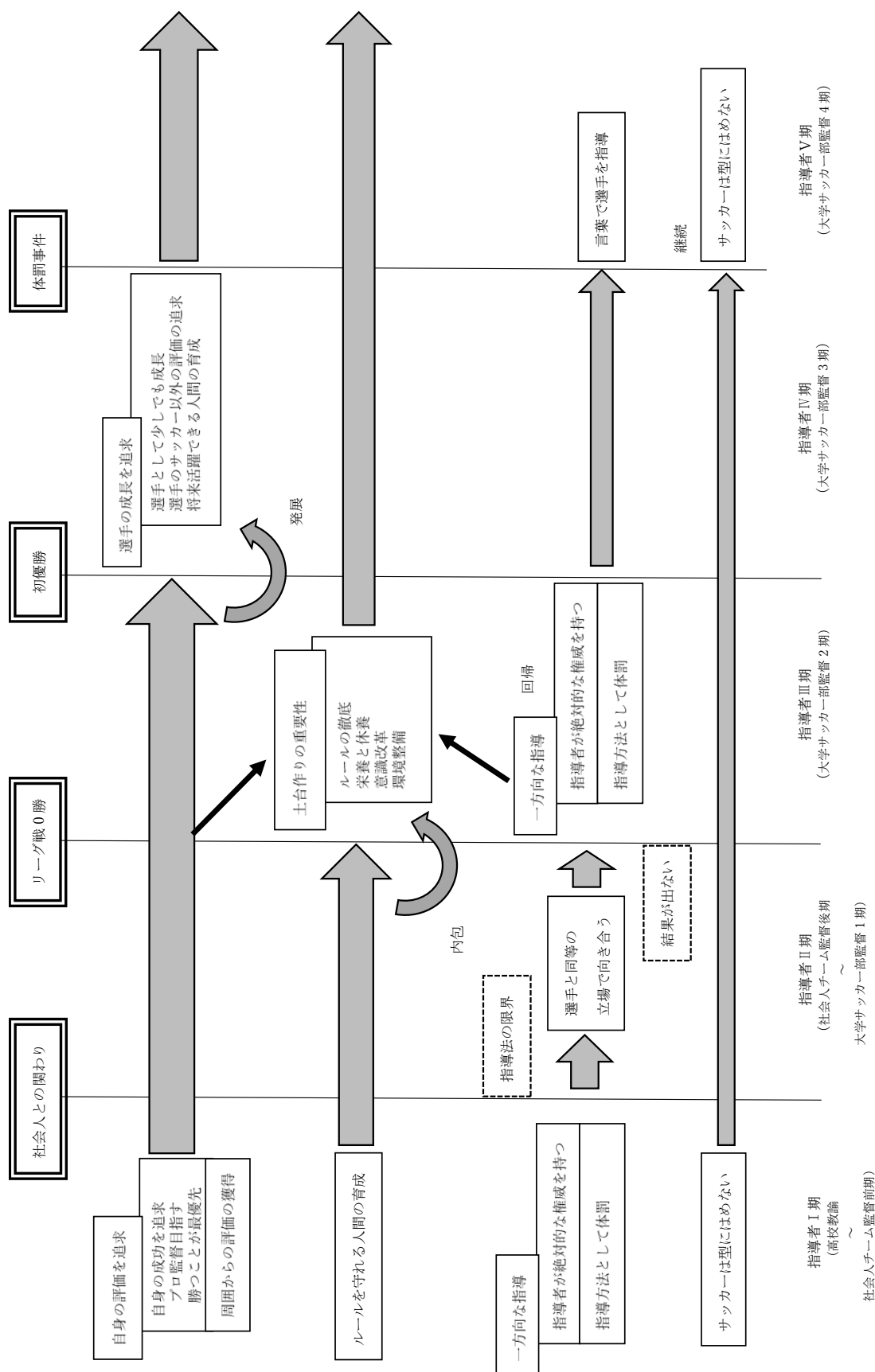


表4 選手期

テーマ	サブテーマ	語り
勝利への強い信念	高い志	1年からレギュラーになって1年生で高校サッカー日本一になったから。だから普通の並の人とは、その志っていうかは違ってると思う。
		1人でどうにかなるもんでもないから。だからリーダーシップをとってきたかな。1年生から1年のキャプテンだったし、自分が日本一になりたいって思っても、自分だけじゃなれないから、周りにはタバコ吸うのはいたりとかさ、ちょっとだめなものいて、そういうのと何回も喧嘩したりしたし、その本気度がちょっと違ったかな。
	勝ちたい	お前らのサッカーはだめだから勝てないだろうって親に言われた時に悔しかったかな。親父のことは好きだったけど、そこはそうゆうふうに言われたのは、悔しかった、だから俺はサッカー名門の高校行きたいって。
		やっぱ優勝したかったから。グラウンドマネージャーが練習メニュー組んだりメンバー決めたりするから、試合に出てない人にそんなの任せたくないって思ったから。だったら自分でやるよと、周りもお前がやった方がいいよって言ってくれたから、キャプテン兼グラウンドマネージャーっていう。
自分で考えてサッカーに取り組む	自分で考えるしかなかった	高校3年間と大学4年間の7年間に今のようなサッカーを教えてくれる指導者がいたら、もっと違ってたのかなって思うこともあるし、高校も大学もほとんどサッカーの練習教われなかったから、だから自分で考えるしかなくてこうゆう指導者になれたかなっていうのはあるかな、自分で考えるしかない。
	自分達で練習する	高校生だけで練習メニュー作って、自分たちで練習して、試合の時しか来ないんだよ。たまに練習来ても椅子に座って寝てるの。そのチームが2回も日本一になってるんだから。
	自分達で考えて日本一	円陣組むときはみんなで監督の言うことなんて聞かなくていいからなって言う話を、俺たちだけでやろうぜって自分たちで作戦練ってこうやろう、ああやろうってやってたから、それで日本一になっちゃったんだから、ある意味すごいと思う。
		親父から出たのはそこまでサッカー名門の高校に行きたいんなら、1年からレギュラーになれば必ず日本一になれば、これができないんだったらサッカーやめろとそういう約束して行ったから、で1年からレギュラーになって1年生で高校サッカー日本一になったから。
目標達成	両親との約束を果たす	昔は春季対抗戦って言ってたんだけど、そこで優勝したら、3,4年生の門限なくしてくれと、その春の大会で優勝したら無くしてくれと、新しい監督に進言したの。俺の時は2部だから、1部2部1部2部で当時入れ替え戦っていうのがあったから、俺1年からレギュラーだから4年連続入れ替え戦フル出場してるの、4年の時最後あげて終わるんだけど、最後4年の時2部なのに1部とか全部出てる大会で優勝したの。
	OBとの約束を果たす	昔は俺らの時代は、先生のいうことを聞きなさいって、先生が絶対なんだって、親も思ってたし世の中も思ってたから、ほとんど先生を批判する親はいなかったから、先生にビンタされて帰ってきたら、家でまた親父にビンタされたから、先生にビンタされるんだったら何したんだって、お前が悪いことしたんだろっていうふうにお前が悪いんだって。
先生が絶対的な権威の時代		

2) 自分で考えてサッカーに取り組む

X氏は高校・大学と指導者が練習に来なかった。語りのなかに、『高校生だけで練習メニュー作って、自分達で練習して、試合の時しか来ないんだよ。たまに練習来ても椅子に座って寝てるの。そのチームが2回も日本一になってるんだから』と語っており、自分達で練習を考えて取り組んでおり、また、日本一になった成功体験があったと推察される。

3) 目標達成

X氏は高校時代は両親と、大学時代はOBと優勝という約束し、約束通り優勝した。語りのなかに、『親父から出たのはそこまでサッカー名門の高校に行きたいんなら、1年からレギュラーになれば必ず日本一になれば、…(略)1年生で高校サッカー日本一になったから。』と語っており、約束通り優勝し、目標達成したことが示唆される。

4) 先生が絶対的な権威の時代

X氏が選手期、先生の権威が絶対という環境のなかで育った。語りのなかに、『昔は俺らの時代は、先生のいうことを聞きなさいって、先生が絶対なんだって、親も思ってたし世の中も思ってた…(略)、先生にビンタされて帰ってきたら、家でまた親父にビンタされたから、先生にビンタされるんだったら何したんだって…(略)』と語っており、両親や時代も先生が権威があること理解しており、また、X氏自身、体罰を受けた経験があるといえる。

5) 選手期の考察

Holmes et al. (2020) のイギリスとオーストラリアのプロラグビー指導者の指導者になる前までの経験に焦点をあて、現在の指導に影響を与えた要因を明らかにした研究では、「リーダーシップ経験」、「指導者からの指導経験」「社会的環境（家族、学校、プロチーム）」が影響していると示された。また、指導者になる前の経験がラグビーに対する「価値観」に強く影響していることが明らかになっている。X氏の選手期と比較してみると、「自身のリーダーシップ経験」と「社会的環境」が一致し、指導哲学に影響していると推測される。しかし、「指導者からの指導経験」に関しては、指導者がいなかったため一致してないことが示唆される。

2. 指導者 I 期

指導者 I 期のインタビューデータから 28 の意味単位が抽出された。指導者 I 期の分析過程を表 5 に示すように、X 氏は指導者 I 期に、「自身の評価を追及」「ルールを守る人間の育成」「一方向な指導」「サッカーは型にはめない」の 4 つの指導哲学のテーマを抽出した。

1) 自身の評価を追及

X 氏の指導者 I 期の指導哲学に、「自身の成功を追及」を抽出した。このことについて、X 氏は次のように述べた。

『やっぱ 20 代の時とか 30 代の時とか、自分はただ有名な監督になりたいとか、結果を残してプロの監督になりたいっていうことが先行してて、指導はどう、指導者としてどうか、教員としてどうか、そういうのがなかったわけじゃないんだけど、自分のことで夢中だったかな。結果がすべてだっていうのが俺の考えだったから。何よりも優勝しなきゃダメなんだと。周りから何言われてもそこに向かって一直線に進んでいた感じ。』

選手期にも示したように、X 氏は高校・大学時代にキャプテンを務めていた。また、練習や試合ではキャプテンの X 氏を中心に、選手達だけで練習メニューや試合戦術を考えていた。その結果、目標であった日本一になった。X 氏は、過去の成功体験をもとに指導者としても成功を追及していたと示唆される。西井（2021）は、社会人になってから逆境や困難を感じる場面において、「“これまでもやってこれたから大丈夫だ”と過去の学校生活の中で得られた成功体験を振り返り、それが行動指針として機能する」と述べ、「成功体験は自分の実績として残り、これから成功を収めたいときにも役立つ経験である」と述べている。また、指導者の価値観や役割の形成については、コーチになってから初めて起こる訳ではなく、選手として活動している時からすでに学びは始まっていると述べられている (Werthner and Trudel, 2006)。このことから伊藤（2017）は、「選手として活動している際に作られる価値観やコーチの役割に対する認識などが、コーチになってからも影響を与えている」と述べている。Benni et al. (2010) は指導哲学の形成について、「コーチとしての経験」、「他者からの影響」、「文献」、「自身の選手経験」の 4 つの要因を挙げており、X 氏の「自身の評価を追及」の形成には「自身の選手経験」が影響を及ぼしていたことが示唆される。このことから、X 氏の「自身の成功を追及」の形成要因に選手期の成功体験が影響していると考えられる。

表5 指導者I期

テーマ	サブテーマ	語り
自身の評価を追及	自身の成功を追及	やっぱ20代の時とか30代の時とか、自分はただ有名な監督になりたいとか、結果を残してプロの監督になりたいっていうことが先行してて、指導はどう、指導者としてどうか、教員としてどうか、そういうのがなかったわけじゃないんだけど、自分のことで夢中だったかな。 早く有名な監督になりたいだったり強いチームをつくって選手権で優勝したいだったり、結果を残してプロの監督になりたいっていうことが先行してて、自分のことで夢中だったかな。自分のことしか考えてない。奥さんのことなんて考えたことなかったし、結果残して有名な監督になりたい一心だったから、勝つことが最優先だったよね。
	周囲からの評価の獲得	もしかしたら本人たちのためでもあったんだけど、きっちりしていることが、サッカー部はしっかりしてるねとか、サッカー部のなんか変わったねとか、そういう言われ方をしたい自分がいたのかもしれない。指導者としてA先生が指導したらサッカー部はこんなに変わったんだ、サッカー部挨拶できるなったよねとか、サッカー部勉強頑張ってるよとか、サッカー部こういうことがいよって、なんかこういう同僚とか上の人にA先生はやっぱ凄いて言われたい気持ちが強かったのかもしれない。 俺は生徒指導から始まって、やっぱその生徒指導の時の自分の評価を気にしてやっていたのかもしれない。
	サッカーよりも生徒指導	サッカーの戦術とかシステムとかどうのこうのよりかは、まず生徒指導、ちゃんとした高校生じゃないとダメだろうって、サッカー云々ではなかったね。スポーツをやる以前に人間としてちゃんとやるべきことをやらないと、ちゃんとするっていうのはルールを守ったり人に迷惑かけないことだから、そこは強制してでもちゃんとやらせたい。
ルールを守れる人間の育成	ルールを徹底	どんな些細のことがあってもルールがルールを破ったらだめ。誰かルールを破るっていうことに対してもいろんな理由があっても、例えば悩んでいるからタバコを吸っていいとはならないだろうって。法律でダメなのに何で吸ってんだとか、そういうのは正座させたり走らせたり徹底してたよね。
	悪い習慣をなおさせる	悪い習慣をなおさせることが優先だから、サッカーでこういうプレーを求めようとかの前段階として、運動部としてルールを守らせることが一番大変だったかな。
	サッカーよりも部活動らしく	教員になってね、一番苦労したのは生徒指導かな。生徒指導っていうのはやっぱこう最初の頃っていうのは時代がそうゆう許されてたから、今で言う体罰があったり、もう要するにルールを守らせる。それが指導なんだっていうのは徹底してた。
一方向な指導	指導者が絶対的な権威を持つ	当時私立高校っていうのはやんちゃな子が多かったから、先生たちの方が力があるんだっていうのを示さないといけなかったの、すごい不良の子が暴れちゃったりとかあったから。 この5年間って言うのは先生監督が絶対で、生徒は服従すべきだろうって、今みたいな話の気持ちではないよね。もう正座しろって言い訳なしにさせたりとかね。それが指導だと思ってた。
	指導方法として体罰	最初からそうゆう学校に行ったから、学校の先生ってこれでいいんだって思ってた当時はね。強制して直させるしかなかったな。時代がそうだったから、俺以外の先生も正座させたりグラウンド走らせたりぶっとばしたりしてたし。そういう時代に先生になったら、それが悪と思ったことはなかった。それが教育とすら思ってたから。そういう先輩教師もたくさんいたわけだし。 高校生はどちらかというと押さえつけられてやってるから、教育時代がさ、まだ未成年者っていうのもあって、先生が絶対で一方向的な指導が多いと思う
サッカーは型にはめない	サッカーは型にはめない	当時から自由だったなサッカーは、あんまり型にはめる気はなくて、基本的には個性を生かすことだけを考えていたから。

また、X 氏の指導者 I 期には「周囲からの評価の獲得」があった。指導者としての始まりが高校教諭だった X 氏は生徒指導で評価を受けたいと思っていた。このことについて、X 氏は次のように述べた。

『もしかしたら本人たちのためでもあったんだけど、きっちりしてるのがサッカー部はしっかりしてるねとか、サッカー部のなんか変わったねとか、そういう言われ方をしたい自分がいたのかもしれない。指導者として X 先生が指導したらサッカー部はこんなに変わったんだ、サッカー部挨拶できるようになったよねとか、サッカー部勉強頑張ってるよとか、サッカー部こういうことがいいよって、なんかこういう同僚とか上の人に X 先生はやっぱ凄いつて言われたい気持ちが強かったのかもしれない。それで上の人たちからも一年目からしっかりしてるって評価されていた』

X 氏は大学卒業後、教諭として高校に勤務していた。学校生活のなかで『教員になってね、一番苦労したのは生徒指導かな』と語っており、生徒指導に注力していたことが示唆される。生徒指導とは、「児童生徒の自発的かつ主体的な成長・発達の過程を支援していく働きかけ（文部科学省、2012）」とされており、「生徒」が成長するための指導と捉えることができる。しかし、X 氏の生徒指導は生徒のためというよりも、X 氏自身が評価されたいという欲求が強かったことが考えられる。下村（2020）はキャリア形成について、承認—自己アイデンティティの確立—自己表現—自己決定という一連のプロセスを紹介しており、初期段階において、他者に自己の存在をまず承認すること、また承認されることがキャリア形成プロセスのアイデンティティの確立においても重要であると述べている。キャリアの始まりが高校教諭であった X 氏は、キャリア形成の初期にあたり、他者に自己の存在を承認する欲求が強かったため、「周囲からの評価の獲得」に至ったと示唆される。

2) ルールを守れる人間の育成

X 氏の指導者 I 期の指導哲学に、「ルールを守れる人間の育成」を抽出した。このことについて、X 氏は次のように述べた。

『サッカーの戦術とかシステムとかどうのこうのよりかは、まず生徒指導、ちゃんとした高校生じゃないとダメだろうって、スポーツをやる以前に人間としてちゃんとやるべきことをやらないと、サッカーどころじゃないよねって、いうことに関しては厳しかった今以上に。』

『(生徒指導は) 部活でもあるし、学内でもあるし、帰る途中やっぱ電車乗って帰るから、もうキリがないから言ったら、謹慎とか停学とか、そんなのサッカーどころじゃないから、それはもう大変だった、高校の先生になってただサッカーを教えたかったのに、生徒指導ばっか。もう練習どころじゃなかった。』

『サッカーは好きだけどたばこも吸うし、友達とも遊びたい。高校でもそうだったんだよね。まずは、運動部らしくしなきゃいけないなって思って、ルールを守れる組織にしないといけないなって。なんでタバコ吸ってたんだよとか。悪い習慣をなおさせることが優先だから。サッカーでこういうプレーを求めようとかの前段階として、運動部としてルールを守らせることが一番大変だったかな。』

X氏が務めていた高校では、学校内外で様々な問題が起こり、サッカーを指導できる環境でなかった。また当時の選手達は、サッカーは好きだが、サッカーに取り組む姿勢や意識は低かった。澁澤ら(2015)は大学バスケットボール指導者の指導哲学の形成について「モデル」「経験」「個人要因」「環境要因」の4つの要因を挙げている。Horn(2008)は、指導哲学の形成について、「社会的文化背景」、「組織の雰囲気」、「指導者の個人的特徴」、「指導者の目標」の3つの要因を挙げている。両者の先行研究で指導哲学の形成について、「環境要因」と「組織の雰囲気」の同様の要因が挙げられた。X氏の指導者I期の指導現場は、不良学生が多くみられ、サッカーの指導よりも生徒指導に迫られていた。また、サッカー部の生徒はサッカーに取り組む姿勢や意識は低く、サッカーを指導できる環境ではなかった。そのため、「環境要因」と「組織の雰囲気」が指導哲学の形成に影響を及ぼし、「ルールを守れる人間の育成」に至ったと示唆される。

「ルールを守れる人間の育成」は選手に良い経験をもたらしていた。このことについて、X氏は次のように述べた。

『最初は生徒指導を一生懸命やってたんだけどだんだんサッカーにシフトして行って、やんちゃな子なりによくなっていったからさ。サッカーも結果を残すとやっぱりちょっと輝けるようになると、たばこ辞めようよだったりちょっとづつよくなってくから。そう意味ではよかったかな』

X氏が務めた当初は、サッカーの指導者やサッカーに取り組む姿勢や意識は低かった。しかし、X氏のルールを守らせる取り組みのなかで、選手はサッカーで結果を残すことができ、また自主的な行動がみられるようになった。Lyle(2002)は、トップアスリートを指導する

コーチングを、「教育指導的な参与コーチング」と「スキル学習的な育成コーチング」に区分した。X氏の場合、トップアスリートではないがこの2つの観点において、「教育指導的な参与コーチング」が大きく作用していた可能性がある。黒田（2008）は、「高校世代にとって必要なのは、人間教育である。これからの人生を生きていくための基礎を固める大切な時期なのだ。人としての基本を身に付けさせないで、どうして選手が育つというのか」と高校生に対する指導として人間教育の重要性について言及している。さらに、北村ら（2005）の、エキスパート高等学校サッカー指導者の指導哲学は、選手の個性や多様性を育みながら、基礎的なスキルの習得を目指す「熟練化」、選手の練習に対する自覚と姿勢「意識化」、スポーツに専念できるような環境への「支援」の3つの要因から構成されていた。北村ら（2005）の先行研究からX氏においては、人間教育の一環として、まずはルールを守らせることにより、選手の練習に対する自覚と姿勢を高める「意識化」を重視していたと推察される。

3) 一方向な指導

X氏の指導者I期の指導哲学に、「一方向な指導」を抽出した。当時X氏が勤務していた高校の生徒について、X氏は次のように述べた。

『当時私立高校っていうのはやんちゃな子が多かったから、先生たちの方が力があるんだっていうのを示さないといけなかったの、すごい不良の子が暴れちゃったりとがあったから…（略）』

『生徒指導をちゃんとしない人は怠慢だって言われて、生徒よりの先生なんかもいたんだけどそういった先生は職員会議で総攻撃されたりしてね、そんな考えだから問題が起きるんだろってのが、100人くらいの職員会議で言われるんだよ。そういう時代だったし、俺が赴任してきたときそうだったから、ぶっ飛ばすことがいけないと思ったことない』

『俺以外の先生も正座させたりグラウンド走らせたりぶっとばしたりしてたし、そういう時代に先生になったら、それが悪と思ったことはなかった。それが教育とすら思ってたから。そういう先輩教師もたくさんいたわけだし。』

X氏が務めていた高校の生徒は不良生徒が多かったため、X氏は一方向な指導で生徒と関わりざるを得ない環境であり、学校側からも一方向な指導を求められていた。また、先輩教

師からの影響により、体罰が指導方法となっていた。Pelletiere et al. (2002) の教師を対象に行った先行研究では、教師は職場環境から外的なプレッシャーを認識している場合、民主的な行動をとる傾向が低くなり、管理的な行動をとる傾向が高くなることが報告されている。また新人コーチが学ぶ場合には他者の媒介の割合が比較的大きいとされており (Trudel and Gilbert, 2013), X 氏は新人コーチではなかったが、人を指導する立場の観点からコーチと教師は近い存在にある。これらのことから、教師になったばかりの X 氏にとっては、他者である先輩教師からの影響が強くあったことが示唆される。R. L. Jone et al. (2003) は、プロサッカーコーチの指導哲学の形成について、「指導経験」、「コーチ資格」、「他の指導者の観察」、「他者からのフィードバック」の4つの要因をあげ、特に「他の指導者の観察」が強く影響していると述べている。これらのことから、教師になったばかりの X 氏にとっては、他者である先輩教師からの影響が強くあり、「一方向の指導」に至ったと示唆される。

また、体罰について冨江 (2008) は、「体罰を経験した者ほど、体罰を肯定的に捉える傾向がある」と述べている。X 氏は自身の体罰経験についてこのように述べた。

『先生にビンタされて帰ってきたら、家でまた親父にビンタされたから、先生にビンタされるんだったら何したんだって、お前が悪いことしたんだろっていうふうにお前が悪いんだって。』

X 氏自身も体罰を受けた経験があったため、指導者になっても体罰をすることに対して、肯定的であったと示唆される。東海林 (2013) は、スポーツの指導において指導者が絶対的な権力をにぎり、指導者が選手の抵抗や手段に関わらず服従を強いるアプローチ方法のことを命令スタイルとしており、典型的な悪い例として昨今の体罰の問題を挙げている。X 氏の場合、スポーツ指導ではないが、語りからこの命令スタイルに似たアプローチ方法に至ったと示唆される。

4) サッカーは型にはめない

X 氏の指導者 I 期の指導哲学に、「サッカーは型にはめない」を抽出した。このことについて、X 氏は次のように述べた。

『当時から自由だったなサッカーは。あんまり型にはめる気はなくて。基本的には個性を生かすことだけを考えていたから。』

『高校も大学もほとんどサッカーの練習教われなかったから、だから自分で考える

しかなくてこうゆう指導者になれたかなっていうのはあるかな。自分で考えるしかない。でもそれがよかったかなって。指導者が高校大学っていなかったのに、日本一になったわけよ。結局監督いらないんだよな。監督なしで俺らは日本一になってたから、サッカーって監督なんかいらんじゃんってずっと思ってたんだよね。だから練習って自分でやるしかないなっていうのが、基本的に自分の考え。』

選手期にも示したように、X氏は高校・大学時代キャプテンを務め、チームを日本一にした。また、監督はいたものの、サッカーの指導を受けたことはなく練習や試合戦術などはキャプテンのX氏を中心に、選手達だけで考えて取り組んでいた。その結果、目標であった日本一になった。そのため、自分で考えて取り組ませることを重視していた。Benni et al. (2010)は、指導哲学の形成要因について、「コーチとしての経験」、「他者からの影響」、「文献」、「自身の選手経験」の4つが述べられており、X氏において「自身の選手経験」が当てはまることが示唆される。また、指導者の価値観や役割の形成について、コーチになってから初めて起こる訳ではなく、選手として活動している時からすでに学びは始まっている(Werthner and Trudel, 2006)。それは、選手として活動している際に作られる価値観やコーチの役割に対する認識などが、コーチになってから影響を与えていると考えられる(伊藤, 2017)。Holmes et al. (2020)は、イギリスとオーストラリアのプロラグビー指導者の、指導者になる前までの経験に焦点をあて、現在の指導に影響を与えた要因を明らかにした研究において、指導者になる前の経験がラグビーに対する「価値観」に強く影響していること述べている。選手期に示した「サッカー自分で考え取り組む」がX氏にとってサッカーに対する価値観であると推論する。そのためX氏は、選手期に自分で考えサッカーに取り組み、実績を残した経験から、「サッカーは型にはめない」に至ったと示唆される。

3. 指導者Ⅱ期

指導者Ⅱ期のインタビューデータから7の意味単位が抽出された。指導者Ⅱ期の分析過程を表6に示すように、X氏は指導者Ⅱ期に、「一方向な指導」から「選手と同等の立場で向き合う」の指導哲学の変遷のテーマを抽出した。

この時期X氏の指導対象が高校生から社会人へ変わった。社会人チームでの指導を行うことで社会人との関わりが転機となり、指導哲学の変遷があったと考えられる。社会人との関わりについて、X氏は次のように述べた。

『社会人になるとさ立場が同等だと思ったんだよ、俺が監督でお前が選手、俺が先

表 6 指導者Ⅱ期

テーマ	サブテーマ	語り
選手と同等の立場で関わる	同等の気持ちで向かい合う	社会人になるとき立場が同等だと思ったんだよ、その経験は今の学生との間でもあって、俺が監督でお前が選手、俺が先生でお前は生徒だって感じはない。同等の気持ちで向かい合ってる。それは社会人の経験で学んだことかな。
	一方的な指導では伝わらない	社会人が相手だから高校生が相手じゃないから、要するに大人として向かい合うって意識があるとまあ大学生も一緒だけど、一方的な指導では伝わらないわけ。高校生までってどっちかと言うと先生からの一方通行の指導が多いわけ、あんまり相手を尊重するとか、ないわけじゃないけど押さえつけちゃおうっていう心理があるから。大人ってそういうわけにいかないから、向かい合おうって気持ちにならなきゃだから、また社会人での指導も経験になった。
	一方的な指導ではうまくいかない	社会人でもぶっ飛ばしてもいいんだよ、高校の時の流れがあったから。だけどそれじゃうまくいかなかったっていうのがあって、大人として向かい合うって方法論みたいのを、やっぱ社会人で経験したかな。
	一方的な指導の限界	多少の反発とかはあったけど社会人相手にもぶっ飛ばしたりしてたから、でもこれじゃいけないなって感じ出したのは社会人を教えていたころかな。社会人を教えたからこそ、そういうやり方は限界があるんじゃないかなっておもったんだよね。
	大人としての向かい方	高校生は、その当時そんなに怒られたからってもめたことがないわけよ。0じゃなかったけど、でも社会人になると、社会人の尊重の仕方ってなってくるのかな。要するに成人としての、大人としての向かい方を求められることが多かった。高校生とちがって、大人と子供の関係のね、確かに監督と選手っていう関係の優位性はあったけど、社会人としてのプライドとか尊厳を傷つけてはいけないなって感じるがあったわけよ。

生でお前は生徒だって感じはない。同等の気持ちで向かい合ってる。それは社会人の経験で学んだことかな。』

『高校生は、その当時そんなに怒られたからってもめたことがないわけよ。0じゃなかったけど、でも社会人になると、社会人の尊重の仕方ってなってくるのかな。要するに成人としての、大人としての向かい方を求められることが多かった。高校生とちがって、大人と子供の関係のね、確かに監督と選手っていう関係の優位性はあったけど、社会人としてのプライドとか尊厳を傷つけてはいけないなって感じるがあったわけよ。』

『多少の反発とかはあったけど社会人相手にもぶっ飛ばしたりしてたから。（高校の時と変わらず？）そうだね。でもこれじゃいけないなって感じ出したのは社会人を教えていたころかな。社会人を教えたからこそ、そういうやり方は限界があるんじゃないかなっておもったんだよね』

X氏は社会人チーム監督当初、高校生と同じように選手と関わっていた。しかし、高校生

と同じようにはいかず、選手から反発を受けることがあった。社会人と関わっていくなかで自身の指導方法に限界を感じ、向き合うことや双方向の関わり合いといった選手と同等の立場で向き合うようになった。Benni et al. (2010) は指導哲学の形成について、「コーチとしての経験」、「他者からの影響」、「文献」、「自身の選手経験」の4つの要因を挙げている。また Burton and Raedeke (2008) は指導哲学の形成について、「コーチの経験が指導哲学の形成するものの一部である」と述べている。両者とも「コーチの経験」が指導哲学に影響を及ぼすと言及している。加えて、伊藤 (2017) は、指導者に影響を与える要因として、「媒介学習」と「非媒介学習」があると示している。媒介学習は、他者との直接的な関わりによって学びが起きる場（例：コーチ資格、学位、セミナー、メンタリングなど）のことを意味している。非媒介学習は、指導者が指導現場で自らの経験をもとに学ぶこととされる。指導者にとって非媒介学習の貢献の方が大きいといわれている（伊藤, 2017）。また加藤ら (2014) の高校バスケットボール指導者の指導観の変容過程を明らかにした先行研究のなかに、普段指導していない中学生を指導したことで指導観が変容したことが示されていた。原仲ら (2016) は、「指導者が自らの指導を批判的思考および批判的視点によって振り返ることは、指導者の成長ならびに指導の向上においてきわめて重要である」と述べ、自身の指導を内省することの重要性を述べている。X 氏も社会人を指導するなかで『うまくいかなかった』と述べていることから、X 氏自身、指導の振り返りをしていたことがうかがえる。このことから X 氏は、指導者Ⅱ期において高校生から社会人へ指導対象が変わり、その指導経験から内省をし、「選手と同等の立場で向き合う」への変遷に至ったことが示唆される。

4. 指導者Ⅲ期

指導者Ⅲ期のインタビューデータから 24 の意味単位が抽出された。指導者Ⅲ期の分析過程を表 7 に示すように、指導者Ⅲ期は、指導者Ⅰ期からの「ルールを守れる人間の育成」を内包した「土台作りの重要性」の指導哲学のテーマを抽出した。また、「一方向な指導」の指導哲学が回帰があった。

まず、指導者Ⅱ期の後半に社会人チーム監督から大学サッカー監督に指導現場が変化した。X 氏は大学サッカー部監督就任当初にあたる、指導者Ⅱ期の後半について、X 氏は次のように述べた。

『もうね、サッカー部じゃないんだよね。まず部員が何人いるのかも、名簿あったけど全員揃ったことなかった。その理由はアルバイトとか… (略)。サッカーは好き

表7 指導者Ⅲ

テーマ	サブテーマ	語り
土台作りの重要性	ルールの徹底	このやり方じゃうまくいかないって、一時的に勝ったとしても何も変わらないって、思ったから寮を作ろうと思ったし、ルールをちゃんと重視しようと思ったし、すべてのルールを作った、タバコは禁止にしたし学生としての在り方みたいのを問いかけた
	栄養と休養の大切さ	アパート生活させたんでは練習しても栄養と休養とトレーニングのバランスが保たれない、いくら練習で頑張っても栄養が足らないんじゃないか休養が足らないんじゃないとか、これでいいプレイヤーにはなれない寮を作って管理しないとダメなんだなってた
	意識改革	アスリートとして高い志を持てってね、何度言ったか、投げかけても当時の彼らは、だって俺らがプロになれるわけじゃないじゃんとか、優勝するわけじゃないじゃんとか、無理だよとか、サッカーは好きなんだけど具体的にそこに手を届くとは思ってない、それを変えるために一つずつ色んな事を変えていかないと
	環境設備	寮を作って志を変えさせた。だからグラウンドもどんどん増えてったし、バスも買ったし、コーチも増えたし、目に見えていろんなものが変わり出した

だけど規制されてまでやりたくない。自分達は監督がいない中でやってきたから、ちょっとうまいのがいて、そのうまいの中心にわがまま放題にやってたから、タバコみんな吸ってたし関係ねえやって、こっちが指導者として言ったって、俺らの方が先にいたと、お前後から来て何言ってんだって言われたからそれがこのサッカー部の最初かな。こいつらに理念だとかタバコやめろとか言っても、それは無理だなんて思った。じゃあいいよと 3, 4 年生は法律で決められてるからタバコ吸えばいいじゃん、1, 2 年生は俺が駄目って言っても、法律が駄目って言ってるんだから駄目って。その代わり練習はきついか、弱音は吐くな、タバコ吸ってんだからきつうと思えって、だけど俺に言われたことはやれと。だから大きな変化をもたらさないで。』

X 氏が就任した大学サッカー部には、指導者Ⅰ期と似たような選手達が多く、サッカーは好きだが、サッカーに取り組む姿勢や意識は低かった。しかし、X 氏は大学サッカー部に対して大きな変化をもたらさなかった。それに関わらず、X 氏就任初年度に、チームはリーグ戦で昇格することができた。このことについて、X 氏は次のように述べた。

『1 年で 2 部に上がった。それが奇跡この歴史の中の全て。ところが 2 部に上がって、お前ら 2 部に上がって、関東の 2 部リーグってこういうリーグなんだよ、こういう歴史があるんだぞって、いい加減タバコやめていろんな志もってやろうよ、って言ったら、大丈夫っすよ、俺らこうやってこのスタイルで 2 部に上がったんだからって、何も変わらなかったの、そしたら 2 分け 5 敗で 1 年で降格したの。だからやっぱりこのやり方じゃうまくいかないって、一時的に勝ったとしても何も変

わらないなって、思ったから寮を作ろうと思ったし、ルールをちゃんと重視しようと思った』

『1勝もできなかったから2分け5敗だったから余計そう思った、あこれじゃあ何年やっても2部でも勝てないし、1部にも上がれない、大学サッカーでは勝負できない喧嘩ができない、もう悔しいっていう気持ちはあったけど、これ時間かかって土台を作らないと、そうそうたる関東のチームの頂点に立つことはないなって思った。全てのルールを作ったタバコは禁止にしたし学生としての在り方みたいのを問いかけた』

就任1年で昇格したことで、X氏は選手に変化を促す働きかけをしたが、選手が何も変わらないまま取り組んだ結果、翌年、リーグ戦0勝で降格した。これを受け、X氏は大学サッカーで優勝することを目的に、まずチームの土台作りに取り組んだ。このことについて、X氏は次のように述べた。

『アスリートとして高い志を持てってね、何度言ったか投げかけても当時の彼らは、だって俺らがプロになれるわけじゃないじゃんとか、優勝するわけじゃないじゃんとか、無理だよとか、サッカーは好きなんだけど具体的にそこに手を届くとは思ってない。それを変えるために一つずつ色んな事を変えていかないと、もうアパート生活させたんでは練習しても栄養と休養とトレーニングのバランスが保たれない、いくら練習で頑張っても栄養が足んないんじゃないか休養が足んないんじゃないか、とかこれでいいプレイヤーにはなれない寮を作って管理しないとダメなんだなって』

『(勝てるようになったのは) まあそういう意識が変わった人間が多くなったから、それはもう寮を作って、志を変えさせた。だからグラウンドもどんどん増えてったし、バスも買ったし、コーチも増えたし、目に見えていろんなものが変わり出したっていうのがこの当時の学生はわかってたから、もう一個作ってくれたとか、俺が作ったわけじゃないけどバスが新しくなったとかキャリーバッグは全部揃ってるとか、他の大学生とかがかっこいいとかみんなからいいよなって、言われるようになってその全てが当時の学生にとってみると、胸を張れるっていうのかなっていうか、意識もいい方にいい方に変わってった、こうゆうのは寮作ったことやグラウンド、コーチが増えたりしたのは全部この時なんだよね。』

X氏は大学サッカー部監督就任当初、選手に大きな変化をせずに取り組ませた。その結果、リーグ戦0勝で降格し、継続的な結果をもたらすことはできなかった。X氏は優勝したいという思いがあり、そのために、規則正しい生活や環境設備といった土台作りをした。加えて、サッカーに取り組む意識や姿勢にも変化をもたらし、継続的に勝利することができた。Côté (1999) は、スポーツ選手のパフォーマンス向上における指導者の役割について、「質の高い練習を維持するには、身体的及び精神的な疲労から回復することが重要である。さらに、練習場や施設といった物的環境、指導者や家族といった人的環境による支援が質の高い練習に与える影響が大きい」と述べている。X氏においても、寮を建設し栄養や休息を確保し、またグラウンドやバスといった物的環境、コーチといった人的環境の支援をしていたことからCôté (1999) の報告と同様の取り組みがみられた。また「ルールを守れる人間の育成」から「土台作りの重要性」の指導哲学の変遷について、X氏は、指導者Ⅰ期、指導者Ⅱ期に、北村ら (2005) で示された「意識化」を重視していたことが示唆される。大学サッカー部監督就任当初も「意識化」の働きかけをしていたが、選手は浸透しきらなかった。その結果、継続的な結果を生み出すことができなかった。それ以降、選手の練習環境や生活面を管理しないと勝てないと感じ、北村ら (2005) が述べたような、スポーツに専念できるような環境への「支援」として土台作りをはじめたと考えられる。その際、指導者Ⅰ期にみられた「一方向な指導」が指導者Ⅲ期に回帰したと考えられる。このことについて、X氏は次のように述べた。

『どっちかっていうとやんちゃな子が多くて、この大学も同じだったんだけど。学力が低い子が悪い子が多くなってわけじゃないんだけど傾向としてやっぱり。俺のスタートは高校も大学もこんな感じだったから… (略).』

『うんあの高校教諭にきた時と大学にきたときは似てて、… (略) なんてタバコ吸ってたよとか。悪い習慣をなおさせることが優先だから。ここは大学も高校も同じだったかな。』

この語りから、指導者Ⅰ期と指導者Ⅲ期の指導環境が似ていたことで「一方向な指導」が回帰したことが考えられる。

「土台作りの重要性」の指導哲学の変遷・内包について、選手期の経験が影響していると考えられる。X氏の選手期に、「勝利への強い信念」があった。指導者Ⅲの語りのなかに、『大学サッカーでは勝負できない喧嘩ができない、もう悔しいっていう気持ちはあった』や『大

学の頂点に立つことはないなって思った、そこはまた負けず嫌いだったから』という語りがあり、勝利を追及していたことがうかがえる。Holmes et al. (2020) のプロラグビー指導者を対象とした先行研究では、指導者になる前の経験が、ラグビーに対する「価値観」に強く影響していたことが明らかになっている。X 氏の選手期においても、サッカーに対する勝利への強い信念が「価値観」となり、指導者Ⅲの指導哲学の変遷・内包に影響を及ぼしたと考えられる。

5. 指導者Ⅳ期

指導者Ⅳ期のインタビューデータから 21 の意味単位が抽出された。指導者Ⅳ期の分析過程を表 8 に示すように、指導者Ⅳ期では、「自身の評価を追及」から「選手の成長を追及」の指導哲学の発展のテーマを抽出した。

「選手の成長を追及」の発展の影響に、「初優勝」が転機となったと考えられる。このことについて、X 氏は次のように述べた。

『初めてタイトルを取って、それ以降だよ。自分の為じゃない考え方を持つようになったのは、サッカー大好きなんだけど、たかがサッカーなんだよって、サッカーに興味や理解のない人からしたらただの蹴り球でしかないんだよっていう感覚を持ちだしたんだよね。』

『サッカー部って素晴らしいよね、日ごろからこんな取り組みをしていたりとか言われてはじめてのチャンピオンだと思うんだけど、この時期はサッカー以外の評価はなかった。この大学の子に対する評価ってどうだったのかなって。』

『サッカー強いんだから人間としてもすごいんでしょって思われるわけ。だけど、サッカーはすごくなっても人間としては成長していないっていうケースがあるわけよ。周りの期待度ってのは、大会の優勝と、素晴らしい人間になることも期待しているところがすごく問われるようになるわけよ。そういうタイミングだったからただサッカーが強いだけじゃダメなんだなってなったわけよ。』

X 氏は指導者Ⅲ期に優勝という目標を掲げ、指導者Ⅳ期で優勝することができた。しかし、X 氏の大学サッカー部の選手達に対する周囲の評価は、サッカー面だけであった。初優勝以降、X 氏自身も選手の評価を追及するようになった。杉浦 (2004) は、「転機というものは一

表8 指導者IV

テーマ	サブテーマ	語り
選手の成長を追及	選手として少しでも成長	サッカーを通して向かいあってるけど、当然彼らが目指してるプロになりたいとか、そういうものを達成できたらと思うけど、でも達成できたとしても人として成長がゼロだったら送り出したくないって言うか、それじゃあちょっと違うんじゃないのって、自分の中で思うし、仮にプロになれなくても、成長していれば十分いい4年間だったんじゃないのかなって、決して煽おだてるわけじゃないけど、お前の人生絶対良くなるよって心から言えるよ。
		ここに来てくれた子、それぞれに30点の子は40点にしてあげたい、70点の子は80点にしたい、それぞれがプラス10点できるように4年間学びとってほしい。
		要はちょっとでも成長しようとするプロセス、俺はレギュラーじゃないからとか、俺はもう怪我したからどうでもいいって言う人間じゃあどうすんだよというのが、俺の考えだから。
	選手のサッカー以外の評価を追及	やっぱり優勝して、最初はみんなすごい凄いついて言って期待値が上がるだけなんだよ。人として素晴らしくなきゃ優勝してもあんまり評価されなんだなっていう事にも出くわす。
		サッカーはすごくなくても人間としては成長していないってケースがあるわけよ。周りの期待度ってのは、大会の優勝と、素晴らしい人間になることも期待しているそこがすごく問われるようになるわけよ。そういうタイミングだったから、ただサッカーが強いだけじゃダメなんだなってなったわけよ。
		サッカー部って素晴らしいよね、日ごろからこんな取り組みをしていたりとか言われてはじめてのチャンピオンだと思うんだけど、この時期はサッカー以外の評価はなかった。この大学の子に対する評価ってどうだったのかなって。
将来活躍できる人間の育成	将来活躍できる人間の育成	初めてタイトルを取って、それ以降だね。自分の為じゃない考え方を持つようになったのは、サッカー大好きなんだけど、たかがサッカーなんだよって。サッカーに興味や理解のない人からしたらただの球蹴りでしかないんだよっていう感覚を持ちだしたんだよね。サッカー好きなんだけどね。
		この目の前にいる若者がただ勝ったとしても、将来に何も生かせないんじゃない意味ないな、彼らに財産を持たせなきゃいけないんだなって思うようになった。
		サッカーを通じてどういう財産を持ってたのかなっていうのが重要だと思うの。大半はプロになれないわけ。ほとんどの人が日本代表になれない、でもサッカーやってきて、俺はこういうことを得ることができたとか、俺はこの先こういうことをベースに仕事頑張ろうとか、家族と仕事頑張ろうとか、サッカーを通じてどういう財産を持ってたのかなっていうのが重要だと思うの。

般的に人が変わる出来事である」と述べている。語りのなかで、『初めてタイトルを取って…』や『優勝してみて、それだけじゃないんだなって…』と述べていることから、初優勝が転機になったとなり、「自身の評価を追及」から「選手の成長を追及」への変遷に至ったと考えられる。

「選手の成長を追及」の指導哲学の発展に関して、要因を2つあげる。

1つ目の要因は、余裕が生れたことだと考えられる。語りとして、『まあ優勝するとさ、余裕もできるし…』や『俺はもう十分評価も受けたし、俺のためじゃないんだよなっていうを

感じたことかな…』、『要は主役が自分なのか、主役が学生なのかの問題だったのかな』と語っており、優勝したことで余裕が生まれ、視野がひろがり、選手の成長、評価を迫及するようになったと示唆される。「選手の成長を迫及」は他の人にプラスの結果をもたらすような思いやり行動として捉えることができる。この行動は向社会的行動と呼ばれ（二宮，2010）、向社会的行動を促進する要因に、自己価値が高くなることで、自分の行動に自信をもち、向社会的行動が促進される（山本，2016）。一方で、植村（1999）の研究結果の中で、向社会的行動の抑制要因として、身体的及び精神的「余裕のなさ」が示された。このことから初優勝を転機に X 氏は、身体的及び精神的に余裕が生れたことで、「選手の成長を迫及」の発展に至ったと考えられる。

2 つ目は、X 氏を取り巻く「他者からの影響」が考えられる。このことについて X 氏は、『やっぱり苦情が来るじゃん、サッカー部が強くなればなるほど周りの見方とかも、弱い時は気にしなかった人たちがメジャーになっていく過程でやっぱり目立つじゃん、サッカー強いんだから人間としてもすごいんでしょって思われるわけ』と語っており、X 氏自身も他者の評価を認識していた。Benni et al.（2010）は指導哲学の形成・発展について、「コーチとしての経験」、「他者からの影響」、「文献」、「自身の選手経験」の 4 つの要因をあげ、また、澁澤ら（2015）は大学バスケットボール指導者の指導哲学の形成について「モデル」「経験」「個人要因」「環境要因」の 4 つの要因を挙げている。両者の先行研究で指導哲学の形成について、「他者の影響」と「環境要因」の同様の要因が挙げられた。X 氏は当時の大学サッカー部選手に対する、周囲の評価を認識しており、X 氏を取り巻く他者や環境が影響を及ぼし、「選手の成長を迫及」の発展に至ったと考えられる。

一方で、「自身の評価を迫及」から「選手の評価を迫及」に完全に変遷したわけではなかった。語りのなかに、『日本一にならないとしょうがない』や『戦う以上、指導者だって選手だって勝ちたいって、負けようと思って練習してないから…（略）だけど、勝てばいいってものでもないなって。』と語った。この語りから、「自身の評価を迫及」が残っていることが示唆できるが、『勝てばいいってものでもないなって。』と述べていることから、「自身の評価を迫及」の比重が小さくなったと推測される。そのため、「選手の成長を迫及」する指導哲学が新たに加わったことが考えられたため、指導哲学の発展とした。

6. 指導者 V 期

指導者 V 期のインタビューデータから 17 の意味単位が抽出された。指導者 V 期の分析過

程を表9に示すように、指導者V期では、「指導方法として体罰」から「言葉で選手を指導」の変遷、「サッカーは型にはめない」の継続、2つの指導哲学のテーマを抽出された。

表9 指導者V期		
テーマ	サブテーマ	語り
言葉で選手を指導	言葉で指導	もう力だったりで抑えたりするやり方は限界なのかなって、だって、ビンタしてもきっと響かねーんだなって、そんな時に、俺にはその方法しかないのかなって思った。もっと違う、こうやって話をするとか違うやり方で、X氏さん言われたらやるよなとか、X氏さんがいうんだからそうだよなって思ってもらえれば、そっちの方が彼らにとってはいいんだよなって思うんだよ。
	とにかく会話	まずとにかく会話するしかないよ一生懸命、生意気なこと言われたりもするじゃん？そういう時はよく口癖で言ってたから、言いたいこと言うのはいいけど話し方とか話す言葉は選べって、ふてってんじゃなえーよと。俺ポケットに手を入れながら話すの。俺そのころよく言ってたのは、反射的にぶっ飛ばしちゃうとあれだからって、相当我慢してんだよ。
	言葉で人を動かす	ぶっ飛ばしたりできないけど逆にそうじゃなくて、言葉であつたり、どうやって人のことを動かせられるっていうところを磨かなきゃいけないなって自分で思ってるかな。
	言葉で心を開かせよう	俺もお前を本気で変えたいからって、そこに言葉しかないなら伝えたいことはストレートに伝えていたから。お前も腹立ってるかもしれないけど、ここにいるってことは何か伝えたいことがあるんだよなって、共通点はサッカーだからな。もし俺がその辺の親父だったら、なんだよこの親父って、そっば向いていくよなって。でもここにいるのは、監督の話を聞こうっていう何かそういう気持ちがあるからいるわけだろうって。とにかく言葉で何とか心を開かせようってすることしかできないわけ。
	この事件を無駄にしてはいけない	亡くなった子を見たことがあるわけじゃないけど、この悲劇を活かさないといけないと思った。スポーツ界において、この命を無駄にしなきゃいけないなって思った。
サッカーは型にはめない	サッカーは自由にやらせていた	自分で考えてやればいいじゃんって、間違ってるとかじゃなくて重要なのは、仲間と統一してやるべきことを、なんというかが共有してトライすればいいと思うし、その結果失敗してもしようがないじゃん、なんでそこで答えをすぐ聞くんだよっていつも思う。
	考える機会を与えたい	指導者がそこでやってしまったら自分たちが考えるってことを学ばないんじゃないかなって思うんだよね。時間がかかっても、間違っても、自分たちで考える機会を与えるべきだって俺は思うの。
	型にはめない	今も昔も変わらないのは、パターンに当てはめたことがないかな。攻撃的なチームなのか守備的なチームなのかっていうざっくりとした指針はあっても、俺のサッカーはこうだからこういうことしなきゃダメだぞ、っていうのは打ち出したことはない。スタイルがないのがスタイル

1) 「指導方法として体罰」から「言葉で選手を指導」の変遷

X氏は指導者V期、「指導方法として体罰」から「言葉で選手を指導」に指導哲学の変遷のテーマを抽出した。このことについて、X氏は次のように述べた。

『スポーツ界の中で、部活の選手が自殺したっていうのは、すごくやっぱり衝撃的

だった。部活っていうのは厳しさの中で上を目指すっていうのがあったから、それがいけないっていう認識はなかったんだよね。(略)。でもこの事件は考えさせられたっていうか。いいとか悪いとかじゃなくて、もっとそういう域を超えた、人が死んじゃったんだっていう。この国では体罰とかってのは絶対にやってはいけないんだなって。それを俺も重く受け止めたから、指導者の立場としても考えたし。世間の風向きが変わったって感じ。』

この体罰事件は、X氏とは競技も指導年代も異なる運動部活動で、体罰が原因となって生徒が自殺してしまった事件であった。指導者IV期まで、X氏は指導方法として体罰があった。X氏は、指導者V期までの体罰に対する考え方について、次のように述べた。

『特に自分が関わってきた指導現場では、こう言ったらあれだけど底辺っていうか、痛みで分からせるのもありなのかなって思ったわけよ。それまで寮生活においては、まあ一緒にすんでたから、9年間。預かってる以上寮生活や私生活においては親・兄貴がわりだったから、ピッチにおいてパスミスやトラップミスでぶっ飛ばしたことはなかったけど私生活においてはあった。』

X氏は語りのなかで『絶対にやってはいけない』や『この悲劇を活かさないといけない』と語った。スポーツ界において、高校生の命を無駄にしなきゃいけないなって思った。』と語っており、体罰事件を重く捉えたことがうかがえる。伊藤(2017)は体罰根絶について、「これまでの取り組みが十分でなかった可能性が高いことも認め、強い意志を持って取り組んでいく必要がある」と述べ、さらに「将来のスポーツのためにも今の大人たちがしっかりと強い意志をもって取り組んでいく必要がある」と述べている。X氏はこの事件をきっかけに、X氏自身も体罰がスポーツ界、社会全体で許されない行為として認識し、体罰根絶について強い意志を持っていると考えられる。

しかし、当初は苦勞しながら言葉で選手を指導していたことがうかがえる。このことについて、X氏は次のように述べた。

『とにかく会話するしかないよ一生懸命。生意気なこと言われたりもするじゃん？ そういう時はよく口癖で言ってたから。言いたいこと言うのはいいけど話し方とか話す言葉は選べって。ふてってんじゃねーよと。俺ポケットに手を入れながら話すの。俺そのころよく言ってたのは、反射的にぶっ飛ばしちゃうとあれだからって。相当我慢してんだよ。おまえに生意気な口きかれて腹立つよって。』

『とにかく会話するしかないよ一生懸命。生意気なこと言われたりもするじゃん？
そういう時はよく口癖で言ってたから。言いたいこと言うのはいいけど話し方とか
話す言葉は選べって。ふてってんじゃねーよと。俺ポケットに手を入れながら話す
の。俺そのころよく言ってたのは、反射的にぶっ飛ばしちゃうとあれだからって。
相当我慢してんだよ。おまえに生意気な口きかれて腹立つよって。』

『どうやったらこの子たちに、経験値を言っても 20 歳とか 22 だから 30 歳になっ
てないから、わかれって言ってもわかんないんだよなってないんだから。そうゆう
のをいろんな例えを出して話した、自分のだめだった話もしたし、大学時代のこと
も。』

苦労しながらも言葉での指導を繰り返す中で、選手の変化について『変わった。だって今
のサッカー部の子がそうだから』と語っていた。Burton and Raedeke (2008)は、「コーチの
経験が指導哲学の形成するもの一部である」と述べている。X 氏も言葉での指導経験のなか
で、言葉で選手の育成する方法が確立したと示唆される。

「言葉で選手を指導」への指導哲学の変遷要因に自己の省察があったと考えられる。この
ことについて、X 氏は次のように述べた。

『たまたま自分が指導した現場で自殺者がでなかっただけで、もしかしたら同じこ
とが起きていたかもしれないと思う自分もいた。もう力だったりで抑えたりするや
り方は限界なのかなって。そういう考え方のきっかけになったのはここかもしれな
いね。』

『ビンタしてもきつと響かねーんだなって。そんな時に俺にはその方法しかないのか
なって思った。俺の指導の下にも大変な思いをした人がいっぱいいるだろうと思っ
て』

体罰事件が X 氏自身の指導方法を振り返る機会となったとうかがえる。杉浦 (2004) は、
「転機というものは一般的に人が変わる出来事である」と述べている。語りのなかで、『そう
いう考え方のきっかけになった…』と述べていることから、体罰事件が転機になったとうか
がえる。水谷 (2011) の熟練した卓球指導者に関する研究のなかで、「病気が転機となり今ま
での指導方法を見直す機会になった」ことが示された。Burton and Raedeke (2008)は、指
導哲学の発展には、(1)自身の行動を振り返ること、(2)他者からのフィードバックを受けるこ

と、が必要であると述べている。X氏の場合、「自身の行動を振り返る」があてはまることがうかがえる。また原仲ら（2015）の研究で、指導者は自らの指導を省察的によって振り返るなかで、成功体験だけでなく、失敗事例も誠実に受容することの必要性を指摘している。語りのなかで『やっぱり失敗で一番解決するのが難しいのはぶっ飛ばしすぎた時かな、ぶん殴らなければよかったって思うことはあるかな。』と語っており、自身の失敗を受容していた。このことから、自己の省察により、「指導方法として体罰」から「言葉で選手を指導」の変遷に至ったと示唆される。

2) 「サッカーは型にはめない」の継続

X氏はサッカーの指導に関して、指導者Ⅰ期～Ⅴ期まで、一貫して「サッカーは型にはめない」が継続していた。このことについて、X氏は次のように述べた。

『今も昔も変わらないのは、パターンに当てはめたことがないかな。攻撃的なチームなのか守備的なチームなのかというざっくりとした指針はあっても、俺のサッカーはこうだからこういうことしなきゃダメだぞ、っていうのは打ち出したことはない。スタイルがないのがスタイル』

X氏はサッカーの指導に関して、指導者Ⅰ期～Ⅴ期まで、一貫して「サッカーは型にはめない」の指導哲学がみられた。指導者Ⅰ期でも示したように、X氏は選手期、サッカーを自分で考え取り組み、実績を残していた。選手期の経験に影響され、サッカーは型にはめないという指導哲学に至ったと示唆された。Holmes et al.（2020）のプロラグビー指導者の、指導者になる前までの経験に焦点をあて、現在の指導に影響を与えた要因を明らかにした研究では、指導者になる前の経験がラグビーに対する「価値観」に強く影響していることが明らかになった。日本バスケットボール協会（2004）は指導現場において、「実際に展開する際にベースになるものとして、指導者の価値観が反映される」と述べている。語りのなかに『指導者が高校・大学っていなかったのに、日本一になったわけよ。だから練習って自分でやるしかないなっていうのが、基本的に自分の考え』と語っており、X氏も選手期の経験がサッカーに対する価値観が形成されたことが推察される。そのため、指導者Ⅰ期～Ⅴ期まで、サッカーに対する価値観が変化することなく、一貫して「サッカーは型にはめない」の指導哲学に至ったと示唆される。

IV. 総合考察

X氏の指導哲学の変遷過程は3つあった。

1つ目の指導哲学の変遷過程は、「自身の評価を迫及」から「選手の成長を迫及」への指導哲学の発展であった。X氏は選手期の成功体験から指導者としても成功したいという欲求から、指導者Ⅰ～Ⅲ期まで「自身の評価を迫及」という指導哲学に至った。そのため、ルールの徹底など管理的な指導をしていた。その後、大学サッカーリーグで初優勝することができた。しかし、X氏の選手に対する周囲の評価はサッカー面しかなかった。人として素晴らしくなることも求められ、指導者Ⅳ期で選手としての成長に加えて、選手のサッカー以外での成長を含めた、「選手の成長を迫及」という指導哲学に至った。また、優勝という目標を達成したことで自己評価が高まり、自分から他者である選手に焦点が変わり、「選手の成長を迫及」への変遷に至った。しかし、指導者Ⅳ期以降にも「自身の評価を迫及」があることが示唆され、完全に変遷したのではなく、「選手の成長を迫及」する指導哲学も新たに加わったことが考えられたため、指導哲学の発展とした。

2つ目の指導哲学の変遷過程は、「ルールを守れる人間の育成」から「土台作りの重要性」の指導哲学の変遷・内包であった。X氏は指導者Ⅰ期で、サッカーの技術や戦術よりも人間育成を重視しており、選手のサッカーに取り組む姿勢や意識などを含めた、「ルールを守れる人間の育成」を行っていた。しかし、その後指導者Ⅲ期において、リーグ戦0勝という結果に終わり、サッカーに取り組む姿勢や意識だけでなく、日常生活からの変化の重要性は痛感したことから、ルールの徹底に加え、栄養や休養、環境設備といった「土台作りの重要性」への変遷に至った。その取り組みとして、寮を建設し、黄金期を迎えることができた。

3つ目の指導哲学の変遷過程は、「一方向な指導」から「選手と同等の立場で向き合う」への変遷と回帰、「一方向な指導」から「言葉で選手を指導」への変遷であった。まず指導者Ⅰ期において、当時の生徒や他の教員の影響から、指導者の権威を示すや体罰といった「一方向な指導」に至った。その後、指導対象が高校生から社会人になり、社会人チーム監督当初も、「一方向な指導」があった。しかし、社会人との関わりのなかで「一方向な指導」ではうまくいかず、自身の指導方法への限界を感じ、向かい合うや双方向の関わり合いといった「選手と同等の立場で向き合う」へ変遷した。その後、指導対象が社会人から大学生になり、初めは学生の意見を尊重していたが、なかなか結果出ず、「一方向な指導」の回帰がみられた。また、指導者Ⅲ期に形成された「土台作りの重要性」を補助する手段として、「一方向な指導」に至ったと推察された。しかし、その後X氏とは競技も指導年代も異なる運動部活

動で、体罰が原因となって生徒が自殺してしまった事件であった。その事件が転機となり、自身の指導方法を振り返り、「言葉で選手を指導」への変遷に至った。

上記の3つがX氏の指導哲学の変遷過程であった。X氏の語りのなかに、他者から助言を受けたという語りはなかった。伊藤(2017)は、指導者に影響を与える要因として、「媒介学習」と「非媒介学習」があると述べている。媒介学習は、他者との直接的な関わりによって学びが起きる場(例:コーチ資格、学位、セミナー、メンタリングなど)のことを意味している。非媒介学習では、指導現場で自らの経験をもとに学ぶことを意味している。指導哲学の形成要因を明らかにした先行研究から「媒介学習」にあたる要因として、「書籍からの学習」、「指導者講習会からの学習」、「指導者からの学び」、「コーチ資格」、「文献」が挙げられた(ロイリーズ, 2007; Benni et al., 2010; R. L. Jones et al., 2003)。また、「非媒介学習」にあたる要因として、「モデル」、「他の指導者の観察」、「他者からのフィードバック」、「他者からの影響」が挙げられた(澁澤, 2015; R. L. Jones et al., 2003; Benni et al., 2010)。またBurton and Raedeke(2008)は、「コーチの経験が指導哲学の形成するもの一部である」と述べ、指導哲学の形成には、(1)自身の行動を振り返ること、(2)他者からのフィードバックを受けること、が必要であると示された。X氏の語りからは、「自身の行動を振り返る」といった語りはみられたが、「他者からのフィードバックを受ける」と語りはみられなかった。松尾(2015)は人の学びについて、「人の成長の70%は仕事経験を通じた学び、20%は他者からの学び、残りの10%は読書・研修からの学びによって決まる」と述べ、学びを深めるためには自身が経験したことが重要であることを報告している。加えて、伊藤(2017)は、指導者にとって非媒介学習の貢献の方が大きいといわれている。X氏の語りからは、媒介学習に関する語りはなく、X氏は指導者としての学びに非媒介学習が大きかったことが考えられる。このことからX氏は、自身の指導哲学の変容過程において、指導現場で起こった転機や指導経験に対して、常に自身自身で考え、答えを見つけ出すようにしていたことが考えられる。

また、X氏の語りのなかにサッカーの戦術やサッカーの指導に関する語りはあまりみられなかった。それよりも、サッカーに取り組む姿勢や環境作りの語りが多くみられた。北村ら(2005)の優れた指導者における、「熟達化」、「意識化」、「支援」の3つの指導哲学の要素からみると、X氏は、「意識化」と「支援」があった上でパフォーマンスの「熟達化」とあるという考えを持っていると考えられる。齊藤ら(2007)のエキスパートサッカー選手の熟達化過程における研究で、「指導者が選手の練習環境を高めていく中で、質を高めるような心がけは非常に重要である」と述べており、選手のパフォーマンス向上の1つに環境の重要性をし

ている。Côté (1999) は、スポーツ選手のパフォーマンス向上における指導者の役割について、「質の高い練習を維持するには、身体的及び精神的な疲労から回復することが重要である。さらに、練習場や施設といった物的環境、指導者や家族といった人的環境による支援が質の高い練習に与える影響が大きい」と述べている。X氏は、指導者Ⅰ期からサッカーに取り組む姿勢の「意識化」として「ルールを守れる人間の育成」の指導哲学があり、指導者Ⅲ期では、それが発展して寮を建設といった「支援」としての「土台作りの重要性」の指導哲学があったと考えられる。このことから、X氏は「意識化」と「支援」があった上でパフォーマンスの「熟達化」があるという考えを持っていると示唆される。

V. 現場への提唱

全体の語りからX氏は、「選手と真剣に向き合う」、「どんな条件でも全力で取り組む」、「自分で考えて取り組む」の3つの特徴があった。

「真剣に選手と向き合う」について、指導者Ⅰ期では『赤の他人の将来のこと考えて指導してるのになんで…（略）でも要は本気で向き合う、それが当時の5年半の高校がそういう学校だった』と語っており、指導者Ⅴ期では『200人以上を全寮制で預かっててその食事を担っている指導者はいないと思う、でもなんか真剣に向き合いたいだけ若者と』と語っていることから、X氏は選手と真剣に向き合っていたことがうかがえる。

「どんな条件でも全力で取り組む」について、指導者Ⅰ期では『誰だって最初は条件が揃ってなかったり、思うようにいかなかったり下手な選手と向き合わなきゃいけない。でも、それをいかに10点の子を30点にできるかっていうトライをしていかないといけない』と語っており、指導者Ⅲ期では『その条件の中で結果を出さなければ、次のステージは開けないんだなって自分のなかでは思ってたから。条件が満たされない中でベストを尽くそうと、じゃなきゃ俺の開ける扉はないなっていつも思ってた』と語っていることから、X氏はどんな条件でも全力で取り組んでいたことがうかがえる。

「自分で考えて取り組む」について、全体の語りから『絶対に人から答えを聞きたくないの、その条件でどうにかしたい』、『行き着く答えが一緒でも自分で考えてやっている、そういう方が面白いじゃん』、『本とかほとんど読まないの。だってさ成功した人の本読んでもさ、真似したくなるじゃん。そういうのも嫌だの、全部自分で考えたいの』と語っていた。また、他の指導者から影響を受けた経験や講習会などから影響を受けた経験はみられなかった。このことから、自分で考えて取り組んでいたことがうかがえる。

X氏は、「選手と真剣に向き合う」、「どんな条件でも全力で取り組む」、「自分で考えて取り組む」この3つをベースとして持っており、指導経験を経ていくなかでの出来事に対して、このベースをもとに指導哲学が発展・変遷したことが示唆される。特に、直面したことに対して自分で考えて、取り組んでいたことがうかがえた。このことは、若手の指導者や経験の浅い指導者にとって有益な情報であると考え、実際の指導現場で起こった出来事は、その現場にいた指導者が一番理解している。だからこそ出来事に対して、まず自分で考えて、取り組むことでよりよい結果が出ると、本研究からいえると考え、

VI. 結論

本研究の目的は、日本における優れた大学サッカー指導者がどのように指導哲学が変化して、現在の指導哲学に至ったのか、その変遷過程を、ライフストーリーインタビュー法を用いて事例研究として明らかにすることであった。本研究の結果、現在の指導哲学には、「選手の評価を迫る」、「土台作りの重要性」、「言葉で選手を指導する」、「サッカーは型にはめない」の4つの指導哲学が明らかになった。その形成には、「選手としての経験」、「指導経験」、「自身のサッカーに対する価値観」など、様々な要因が絡みあっていることが明らかになった。X氏は、自身の指導哲学の変容過程において指導現場で起こった転機や指導経験に対して、常に自身自身で考え、答えを見つけ出すようにしていた。このことは、本研究で明らかになった指導哲学を正解とするのではなく、この指導哲学に至るまでに、常に試行錯誤しながら、取り組むことの重要性があるといえる。

本研究では対象者の個別事例を重視しながら、指導哲学の形成と変遷の過程を示すことができた。そのため対象者は1名だったが、今後のコーチング学研究の可能性を広げることができたと考える。本研究のさらなる発展のためには、他の指導者との比較や他競技の指導者との比較を行うなどの研究が望まれる。また、課題として、指導者の指導哲学が変化したことで、選手やチームがどのように変わったかという課題が挙げられた。しかし、変遷過程をリアルに示せたことで、スポーツ指導者を対象とした研究の発展、そして指導者育成の一助となることを願う。

VII. 文献

- ・ A,Bennie and D,O'Connor.(2010)Coaching Philosophies: Perceptions from Professional Cricket, Rugby League and Rugby Union Players and Coaches in Australia. International

Journal of Sports Science & Coaching, 5 : 309-320.

- ・ 會田宏・船木浩斗 (2011) ハンドボールにおけるコーチング活動の実践知に関する質的研究：大学トップレベルのチームを指揮した若手コーチの語りを手がかりに. コーチング学研究, 24 : 107-118.
- ・ 會田宏 (2014) コーチの学びに役立つ実践報告と事例研究のまとめ方. コーチング学研究, 27(2) : 163-167.
- ・ Burton, D. and Raedeke, T. (2008) Sport psychology for coaches. International Journal of Sports Science and Coaching, 3(2) : 291-292.
- ・ Boyatzis, R. E. (1998) Transforming qualitative information: Thematic analysis and code development. Sage Publications, Incorporated, Thousand Oaks.
- ・ ロビン・S. ビーリー：徳永幹雄訳 (2009) コーチングに役立つ実力発揮のメンタルトレーニング. 東京, 大修館書店.
- ・ Côté, J. (1999) The influence of the family in the Development of Talent in Sport. The Sports Psychologist, 13 : 95-117.
- ・ Côté, J. and Salmela, J.H. and Trudel, P. and Baria, A. and Russell, S. (1995) The coaching model : A grounded assessment of expert gymnastic coaches' knowledge. Journal of Sport & Exercise Psychology, 17(1) : 1-17.
- ・ Côté, J. and W, Gilbert. (2009) An Integrative Definition of Coaching Effectiveness and Expertise. International Journal of Sports Science & Coaching, 4 (3) : 307-323
- ・ Denzin N. K. and Lincoln Y. S. (2000) Handbook of qualitative research. Thousand Oaks, California : Sage Publications. (Denzin N.K. and Lincoln Y. S. 平山満義 (訳) (2006) . 質的研究ハンドブック 北大路書房).
- ・ 出口恭平・渡正 (2013) Jリーグにおけるキャリア選択のパターンとその変容. 徳山大学論叢, 76 : 119-136.
- ・ Eicsson, K.A. (2001) Expertise. In R.A. Wilson and F.C Keil (Eds.) The MIT Encyclopedia of the Cognitive Sciences. Cambridge, MA: The MIT Press.
- ・ Gilbert, W.D. and Trudel, P. (2004) Role of the coach: How model youth team sport coaches frame their roles . The Sport Psychologist, 18 : 43.
- ・ ゲキサカ (2020). 大卒 J クラブ 20 年加入内定者一覧. (2011-2020 年)
<https://web.gekisaka.jp/pickup/detail/?266016-266016-fl>, (参照日 2021 年 10 月 1

日).

- ・ 原仲碧・中山雅雄・小井戸正亮・桑原鉄平・森政憲・浅井武 (2015) 育成年代サッカーコーチ (元Jリーガー) のコーチング実践知に関するライフストーリー研究. コーチング学研究, 28(2): 163-173.
- ・ 原仲碧・中山雅雄 (2016) 育成年代プロフェッショナルサッカーコーチのコーチングに関するライフストーリー. 日本オーラル・ヒストリー研究, 12: 123-144.
- ・ 船橋孝恵 (2005) 教養としてのスポーツ心理学. 徳永幹雄編. 大修館書店: 東京, p152.
- ・ International Council for Coaching Excellence, Association of Summer Olympic International Federations, and Leeds Metropolitan University.(2013)Human Kinetics.
- ・ 和泉隼・森本吉謙 (2015) 大学サッカーにおけるトップレベル指導者のコーチング・メンタルモデル. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文, 16: 17-23.
- ・ 伊藤雅充 (2017) コーチングとは何か. 日本コーチング学会編コーチングへの招待. 大修館書店: 東京.
- ・ 勝田隆 (2002) 知的コーチングのすすめ. 大修館書店: 東京.
- ・ 北村勝郎・齊藤茂・永山貴洋 (2005) 優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか? -質的分析によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築-. スポーツ心理学研究, 32: 17-28.
- ・ 黒田和生 (2008) トモニイコウ. アートヴィレッジ: 東京.
- ・ 加藤篤・堀野博幸 (2014) 競技レベルの違いとコーチング・メンタルモデル-X 県内高校サッカー指導者の事例研究-. スポーツ科学研究, 11: 146-158.
- ・ 加藤敏弘・新保淳 (2014) バスケットボール指導者の指導観の変容過程-茨城県バスケットボールスクールの指導を体験して-. 教科開発学論集, 2: 117-127.
- ・ 金井壽宏・楠見孝 (2012) 実践知-エキスパートの知性-. 有斐閣: 東京.
- ・ 公益財団法人日本体育協会 (2015) コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」作成事業報告書. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/hakusho/nc/_icsFiles/afieldfile/2018/06/15/1406196_3_1.pdf, (参照 2021 年 10 月 1 日).
- ・ 児玉昌久・城佳子・上村真美・進藤由美 (1995) スポーツの指導法と選手の認識との関係. 早稲田大学体育学研究紀要, 27: 63-69.
- ・ 古賀康彦・堀野博幸 (2013) Jリーグクラブ・ユース指導者と高等学校サッカー部指

導者との指導哲学の比較. スポーツ科学研究, 10 : 173-182.

- ・ 近藤邦夫・保坂亨・岡村達也 (2000) 子供の成長・教師の成長. 新曜社：東京大学出版館.
- ・ Myers, N.D. and Vargas-Tonsing, T. M. and Feltz, D. L. (2005) Coaching efficacy in intercollegiate coaches: sources, coaching behavior, and team variables. *Psychology of Sport & Exercise*. 6 : 129-143.
- ・ 松尾 (2015) 「経験学習」ケーススタディ. ダイヤモンド社：東京.
- ・ 水谷雄城 (2011) 熟練した卓球指導者の成長過程に関する事例研究 (修士論文). 早稲田大学, 東京.
- ・ 文部科学省 (2013) 生徒指導って, 何?. <https://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf01.pdf>. (参照日 2022 年 1 月 6 日).
- ・ 文部科学省 (2013) スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議 (タスクフォース) 報告書. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/017/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/06/12/1337250_01.pdf, (参照日 2021 年 10 月 1 日).
- ・ Neal, P. (1978) *Coaching Methods for Women*, Addison-Wesley Publishing Company, Reading, USA.
- ・ 西本亮太郎・南学 (2021) 成功・失敗経験に対する自伝的推論が生きがい感に及ぼす影響. 三重大学教育学部研究紀要, 72 : 221-230.
- ・ 中畠洋 (2015) 初学者のための質的研究 26 の教え. 医学書院：東京.
- ・ 灘光洋子・浅井亜紀子・小柳志津 (2014) 質的研究法について考える-グラウンデッド・セオリー・アプローチ, ナラティブ分析, アクションリサーチを中心として-. 異文化コミュニケーション論集, 12 : 67-84.
- ・ 日本体育協会ほか (2013) スポーツ界における暴力行為根絶宣言. https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/koho_kyanpen/news/bouryokukonzetsusengen.pdf. (参照 2020 年 12 月 15 日).
- ・ 日本バスケットボール協会 (2014) バスケットボール指導者教本 改訂版, 上巻. 大修館書店.
- ・ P. Holmes and Richard, L. and Andrew, S. (2020) The influence of early life experiences on English and Australian Super League coaches' learning. *Sport, Education and Society*, 26 : 202-213.

- ・ Pelletier, L and G, Seguin-Levesque and C, Legault. (2002). Pressure From Above and Pressure From Below as Determinants of Teachers' Motivation and Teaching Behaviors. Journal of Educational Psychology. 94 (1) : 186-196.
- ・ R. L. Jone and K. M. Armour and P. Potrac. (2003) Constructing Expert Knowledge: A Case Study of a Top-level Professional Soccer Coach. Sport, Education and Society, 8 (2) : 213-229.
- ・ レイナーマートン：大森俊夫・山田茂監訳 (2013)スポーツ・コーチング学-指導理念からフィジカルトレーニングまで-. 西村書店：東京.
- ・ ロイ・リーズ, コル・ヴァン・デルミア：進藤正幸訳 (2007) サッカー・サクセフルコーチング-指導者として成功するために-. 大修館書店：東京
- ・ 桜井厚・小林多寿子 (2005) ライフストーリー・インタビュー-質的研究入門-. せりか書房：東京.
- ・ 桜井厚 (2012) ライフストーリー論. 弘文堂：東京.
- ・ 佐良土茂樹 (2015) M.シャシェフスキーのコーチング哲学における基本要素-「スタンダード」および思慮」の意義-. バスケットボール研究, 1 : 47-61.
- ・ 佐良土茂樹 (2018) 「コーチング哲学」の基礎. 体育学研究, 63 (2) : 547-562.
- ・ 澁澤秀徳・町田萌・濱野光之 (2015) 大学バスケットボール指導者の指導哲学とその形成過程. バスケットボール研究, 1 : 73-86.
- ・ 下村英雄 (2020) 社会正義のキャリア支援-個人の支援から個を取り巻く社会に広がる支援へ-. 図書文化社：東京.
- ・ 俵尚申 (2003) スポーツにおけるコーチングー考察. 嘉悦大学研究論集, 46 (1) : 189-209.
- ・ 東海林裕子 (2013) コーチングのジレンマとその解決に向けた新しいモデルの提案. コーチング学会, 28 (1) : 15-28.
- ・ 塚田守 (2008) ライフストーリー・インタビューの可能性. 梶山女学園大学研究論集, 39 : 1-12.
- ・ 土屋雅子 (2016) テーマティック・アナリシス法-インタビューデータ分析のためのコーディングの基礎-. ナカニシヤ出版：京都.
- ・ 富江英 (2008) 中学校・高等学校の運動部活動における体罰. 埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), 8 : 221-227.

- ・ 植村里恵（1999）向社会的行動の生起過程に関する探索的研究．名古屋大学教育学部紀要，46：173-185.
- ・ 山本順之（2009）大学におけるスポーツに役割に関する研究：大学スポーツの変遷と発展．社会文化研究所紀要，64：81-99.
- ・ 横森巧（2008）サッカー監督の流儀．羽中田昌編．スキージャーナル株式会社：東京，p19-20.
- ・ 山本ちか（2016）中学生の向社会的行動の変化と全体的自己価値との関連．名古屋文理大学紀要 17：81-85.
- ・ 吉井四郎（1986）バスケットボール指導全書 1 コーチングの理論と実際．大修館書店：東京.
- ・ Werthner, P. and Trudel, P.(2006)A New Theoretical Perspective for Understanding How Coaches Learn to Coach. Sport Psychologist, 20(2)：198-212.

VIII. 謝辞

本研究にご協力していただいた大学サッカー部監督の方、ご多忙の中、心よく受け入れていただき誠にありがとうございました。本研究から得られた貴重なデータ及び結果は若いサッカー指導者や大学サッカー指導者のみならず全てのスポーツ指導者の育成に必ず繋がると確信しています。また私自身、研究という目的でありましたが、お話を聞いたことは大変貴重な体験であったため、長時間インタビューになってしまったことはお詫び申し上げます。しかし、お話を聞いていくうちに、指導に対する考え方や選手育成に対する考え方、人格や人柄に魅了され、研究とは逸脱したお話をしていました。また、私自身の指導における個人的な悩みや相談にも親身になっていただき、ご自身の経験談も踏まえながらお話していただき、私の現在の指導に活かされています。これからも、現場でのご活躍、日本サッカー発展へのお力添えを期待しております。また、お忙しいとは思いますが、どうぞご自愛ください。また同大学サッカー部関係者の方々、日程調整やお飲み物を毎回お出ししていただき誠にありがとうございました。